

国際医療福祉大学 臨床医学研究センター

医療法人財団順和会

山王病院

山王メディカルプラザ

新宿東クリニックさんのう新宿訪問看護ステーション
国際医療福祉大学東京ボイスセンター



山王病院

内科/消化器科/胃腸科/循環器科/神経内科/
内分泌・代謝/外科/消化器外科/乳腺外科/
肛門科/脳神経外科/リウマチ科/血液内科/
血液外科/アレルギー科/小児科/産婦人科/
整形外科/耳鼻咽喉科/泌尿器科/皮膚科/
眼科/放射線科/リハビリテーション科/麻酔科/
歯科/歯科口腔外科/小児歯科/矯正歯科/
インプラント科

- リプロダクションセンター(不妊症治療)
- 予防医学センター(人間ドック・健康診断)
- 呼吸器センター(呼吸器内科・呼吸器外科)

山王メディカルプラザ

内科/消化器科/循環器科/内分泌・代謝/
耳鼻咽喉科/精神神経科/人工透析センター/
オンコロジーセンター/女性腫瘍・内分泌センター/
神経科/歯科/健康診断/訪問診療

- 国際医療福祉大学 東京ボイスセンター

山王病院

<http://www.sannoclc.or.jp>

〒107-0052 東京都港区赤坂8-10-16

TEL03-3402-3151

「青山一丁目」駅4番出口より徒歩4分

「乃木坂」駅3番出口より徒歩4分



TOKYO FULLBRIGHT ASSOCIATION
東京カブライオン

NEWSLETTER

No.17

December
2004



国際医療福祉大学

入試事務室 TEL. **0287-24-3200**

〒324-8501 栃木県大田原市北金丸2600-1

URL <http://www.iuhw.ac.jp>

2005年度開設

薬学部 薬学科

リハビリテーション学部 理学療法学科/作業療法学科 [福岡県大川キャンパス]

保健学部

看護学科/理学療法学科/作業療法学科/言語聴覚学科/視機能療法学科/放射線・情報科学科

医療福祉学部

医療経営管理学科/医療福祉学科(介護福祉士コースあり)

大学院

医療福祉学研究科

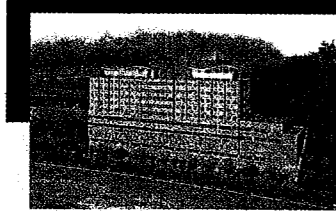
修士課程

保健医療学専攻・医療福祉経営専攻

博士課程

保健医療学専攻

附属・関連臨床実習施設



国際医療福祉大学附属熱海病院



国際医療福祉大学クリニック



国際医療福祉病院



山王病院

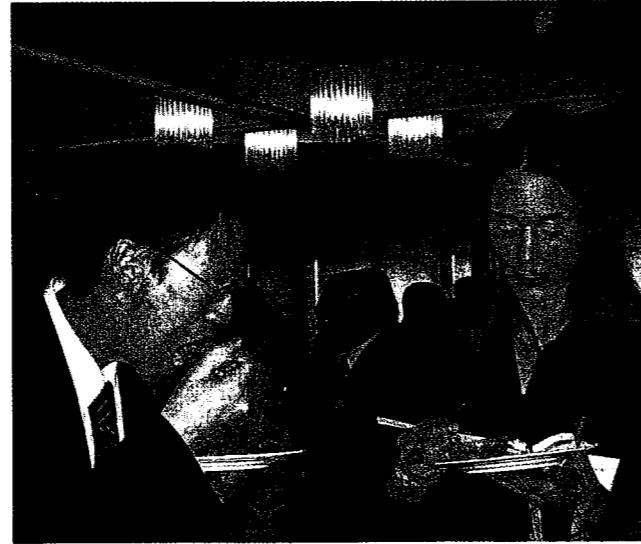
★2005年3月、東京都港区に附属三田病院(仮称)を開設予定!



総会でのスナップ



グランディエー歓迎会



明石 康氏 講演

「イラク・国連・日本」(抄)

<明石康氏 プロフィール>

1954年 東京大学教養学部卒業
 1955年 バージニア大学大学院、
 フレッチャー・スクールフルブライター
 1957年 国連入り(日本人初)、国連広報担当事務次長、
 軍縮担当事務次長、事務総長特別代表(カンボジア、
 旧ユーゴスラビア)等歴任
 現在 スリランカ平和構築及び復旧・復興担当日本政府代
 表、日本紛争予防センター会長、人口問題協議会会
 長、日本国際連合学会理事長、群馬県立女子大学外
 国語教育研究所所長、立命館大学大学院及び東洋英
 和女学院大学大学院客員教授

私はフルブライト留学生として、1955年にバ
 ジニア大学に入り、国際関係の修士号を取りまし
 た。それからフレッチャー法律外交大学院でPhd.
 を取ろうと思ったのですが、1956年に日本が国連
 に加盟し、国連事務局から日本人の政務担当官が
 ほしいということで、途中でフレッチャースク
 ールをやめて、日本人第1号として国連で仕事を始
 めることになりました。

イラク暫定政権と国連 イラクの情勢は今非常に
 悪くなっています。アメリカも当初の目的を達成
 できないどころか、ますます深い沼に入り込んで
 いくようです。その中で、アメリカとイギリスが
 新しい共同決議案を国連安全保障理事会に提出し
 採択されました。主権は6月30日に暫定占領当局
 (CPA) からイラク暫定政権の手に渡されることにな
 りました。

来年の1月31日までには国民議会の選挙を民主
 的な、自由な選挙で行うこともタイムテーブルに
 入っています。この決議案で顕著なのは、国連の
 特別代表であるブラヒミさんの役割が極めて大き
 いことです。ブラヒミさんを私はよく知っており
 ます。元アルジェリアの外務大臣で、ハイチやア
 フガニスタンの国連特別代表を務め、国連の中
 では、ずば抜けた分析能力・交渉能力を持った、す
 ばらしい人だと思います。

国連の役割は、政治面では大きく、将来、復

興・復旧面でも大きくなっていくでしょう。しか
 し、軍事面では多国籍軍に頼らざるを得ない状態
 です。昨年8月末、バグダッドで、国連事務所の
 あるカナルホテルが爆破されて、国連事務総長特
 別代表をしていたセルジオ・デメロと、その部下
 20名近くが亡くなりました。デメロはブラジル出
 身で、カンボジアでも旧ユーゴスラビアでも、私
 の補佐の1人として活躍してくれた人物です。国
 連はイラクの状態が不安定ですから、きちんと安
 全を保てる保障がないとイラクには出て行かない
 ということになっています。

国連と大量破壊兵器 今回のイラク戦争は、1991
 年の湾岸戦争とはかなり性格が異なります。湾岸
 戦争はイラクが明確な形でお隣のクウェートに侵
 略行為を行い、安保理はこぞって湾岸戦争を承認
 し、支援しました。残念ながら、今度のイラク戦
 争では、そのような歩調の一致は見られないまま
 に戦争が始まりました。わが国でも意見が割れて
 いるのは皆様もご存じのとおりですが、私はこの
 戦争をアメリカが始めたのは賛成できるとして
 おります。

その理由の一つは大量破壊兵器の問題です。核、
 核兵器、生物兵器、化学兵器を、テロリストが手
 にした場合、非常に多くの市民が殺傷される危険
 が出てきました。

大量破壊兵器は今のところ発見されておられま
 せん。私は1991年湾岸戦争直後に、国連の軍縮担
 当事務次長を務めており、当時、国際原子力機関の
 事務局長ハンス・ブリクスと、国連の査察委員会
 の委員長ロルフ・イケウスと3人で、バグダッド
 に飛びました。われわれは、国際原子力機関の査
 察がすでに行われていた施設と同じ屋根の下の壁
 一つ向こうに、大規模な秘密ウラン濃縮施設があ
 ることを発見しました。明らかに核兵器製造を秘
 密裏に行っていたという証拠が見つかったのです。
 ほかに化学兵器、生物兵器の製造と保有の証拠
 が見つかりました。サダム・フセイン政権は、こ
 のような兵器を作っておりましたし、イランとの

戦争で使い、自国の内部でも北部のクルド族に対して、大変無残な形で使用しました。

湾岸戦争後も国連の査察委員会はイラク国内で査察を続けておりました。サダム・フセインは大量破壊兵器が全くないという報告を国連に出していませんでしたので、このような大量破壊兵器をフセインが持っているだろうと、国連が疑問を持ったとしても当然です。

ところが、米英軍がイラクの国内を探したのですが、このような兵器が見つかりませんでした。オーストラリアのトレバー・フィンリーという私の尊敬する軍縮の専門家を含め、国連の査察関係の専門家は、一つの仮説を出しています。サダム・フセインは、それまで持っていた大量破壊兵器を1998年ぐらいに破壊してしまったのではないか、そのことを国連に報告しないで、まだ持っているかのような姿勢を示すことによって、アメリカその他から攻撃がないように、脅かしていたのであろう、というのです。私もそのように思っています。

また国民の多数を恐怖と圧政によって支配する政権に対する人道的介入という観点からも、戦争を行おうと考える国が出てきたとしても不思議ではありませんでした。中東地域全体の平和と安全という見地からいっても、石油資源の安定的な供給という点から見ても、イラクのような軍事力を持った政権は、中東地域の平和にとって思わしいものではなかったのです。

このように大量破壊兵器、抑圧的な政権の性格、中東の平和といった三つの観点から見て、イラク戦争が安保理の十分なサポートなしで行われたとしても、その事情は理解できるというのが私の主観的な考えです。

アメリカのイラク戦争 しかし、アメリカの戦争のやり方はいかにもまずかったと思います。国際政治の常識では、戦争に勝利するよりも、戦後をきちんと処理する方が難しいことは、私自身、カンボジアPKOでも経験しました。戦後処理にあたって、アメリカがイラクの軍と警察を全面的に武装解除したのは、乱暴すぎたと思います。サダム・フセイン政権の残党を外科手術したあとは、

軍と警察の大半は残すべきだったでしょう。

アメリカは20世紀の100年間において、世界各地で約16ヶ所に介入しております。カーネギー国際平和財団の分析によりますと、その16の国で、人道的観点から、民主政権を打ちたてるために、理想を持って介入したけれども、そのうち成功した例はわずか4例にすぎない、それは戦後の日本とドイツとパナマとグラナダということなのです。

戦前日本には議会政治の一時期がありましたし、ドイツにもワイマール共和国の一時期が、ナチ出現の前にありました。パナマとグラナダはアメリカが民主化を導入した例証として挙げるには貧弱だと思います。民主主義の導入は、20世紀から21世紀にかけての大きな理想だと思いますが、それをアメリカが一方的に導入するのは、成功例も少ないし、犠牲も大きいわけです。イラクで行うことになったら、相当の準備と覚悟が必要だし、国際的な幅広い支持があって初めて成功することを、アメリカの政策当局者は知るべきだったと思います。

アメリカはODAの約40%を、NGOを通じた支援活動に使っております。政府の支援もありますが、もっときめ細かな、地に足のついた小型のプロジェクトは、NGOが得意とするところなのです。NGO活動は、これから特に日本にとっては必要なことだと思います。しかし、私は善意のボランティア活動と、NGOのプロとしての活動を混同してはいけません。欧米のNGOは、アメリカの「ケアー・インターナショナル」、イギリスの「オックスファム」、フランスの「国境なき医師団」など、何万人もの人員を擁し、世界数十カ国で大規模な活動をしています。どれくらいの危険があるかについても、情報を集め、危機が起きたときの対応措置も考えながら慎重に行動しています。そのようなことを、わが国のNGOも身につけないといけません。自分が善意で行動しているのだから、相手は理解してくれるに違いないという甘えを持つのは危険です。

私は現在、スリランカの平和構築と復旧・復興のための日本政府代表をしています。スリランカでは約20年間にわたって、南部のシンハラ系の仏教徒と、北部と東部に住むタミール系の、主とし

てヒンズー教徒の間はかなり血生臭い紛争が繰り返され、約6万5,000人の犠牲者が出ております。そのような所でも、欧米のNGOは平気で仕事をしておりまして、国連の援助機関であるUNDPの職員も仕事をしておりまして、残念ながら、わが国のNGOの姿は見えませんでした。停戦協定ができたのは2年前ですが、その時も日本のNGOの姿は見えませんでした。私はぜひとも日本のNGOも姿を見せてほしいと思ったものですから、私が顧問を務めているアムダ(AMDA)に頼んだところ、巡回診療を開始してくれました。これは非常に感謝され、成功したと思います。

そのほかにも、ブリッジ・ユーシア・ジャパンというNGOが、北部の「タミール解放の虎」の支配地域で、細々とですけれども、いい仕事をしています。日本だけに通用するような、孤立的平和主義と、日本の国内で安全であればいいという考え方は、これからのグローバル化した世界では、許されないと考えております。

日本とPKO 国連PKOは、1992年のカンボジアPKOに自衛隊が参加したのが、わが国としては初めてです。その後、東ティモールにも1個大隊を出し、来月帰ってきます。いわゆるPKOの原則である、当事者全部の合意という原則、国連があくまでも中立的に行動するという原則、武器使用は自衛のために必要最小限に止めるという原則は、90年代後半以来、激しくなった内戦の中では、貫徹できなくなっています。

ブラヒミさんがまとめたブラヒミレポートの言う通り、以前より強力なPKOが必要な時代になってきていると思います。

カンボジアPKOのときは、わが国と同じく新入生として、若葉マークで参加したドイツは、今や第3世代のPKOといわれる、アフガニスタンの治安支援部隊にも参加しております。イラクではアメリカに盾突いていますが、隣のアフガニスタンでは約1千人のドイツ人たちが、PKOならびに多国籍軍に参加しているのです。わが国はちょっとドイツに水をあけられたという感じがあります。

日本の多国籍軍参加 わが国もそろそろ多国籍軍への参加を考えていいと思います。国際平和協力

懇談会の提言の中でも、この問題で議論が沸騰しました。私は座長として、国連決議がある多国籍軍への参加や、医療、輸送、通信のような後方支援的ロジスティックスの任務への参加は、コンセンサスが得られると思ひ、まとめました。朝鮮半島を巡る北東アジアでは、国連や国連安保理のお墨付きのない多国籍軍であっても、目的・状況次第では参加する可能性も考えるべきではないでしょうか。

ソフトな安全保障 結論としまして、日本のこれからの外交は、ますます多角的に、多層的に展開していかなくてはならないと思います。日米関係を基軸に考えるという基本のうえに、アジアをもっと重視するという観点を付け加えていくことが必要だと思います。国連重視ももちろん大事です。安全保障にはハードな安全保障と、ソフトな安全保障があります。アメリカを中心にしたハードな安全保障も無視することは許されませんが、日本が最も得意とするソフトな安全保障、つまりODAや文化外交、信頼醸成、技術協力などをもっとやるべきだと思います。

9.11以来、先進国は大体ODAを増やしており、5年間もODAを減らし続けているのはわが国だけです。国連分担金も払いすぎという声がありますが、私は大変悲しいと思っています。ODAの総額では、日本はアメリカに次ぐ2番目ですが、一人当たりしてみると少ないのです。国連はGDPの0.7%をODAとして出すべきだと決めております。スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、オランダといった国々は、0.7%を突破しております。わが国はたった0.21%くらいで、アメリカは0.1%ちょっとというところです。総額だけをとれば立派ですが、一人当たりしてみると大したことはありません。国連の通常予算の分担額も、一人当たり700円くらいですが、年額その10倍の7,000円くらい払ってもいいと思う方がたくさんおられるのではないのでしょうか。

これからはより活発な、よりダイナミックな外交、政府だけに任せない、シビリアンやNGOも含めた、迫力のある、顔の見える外交を目指すべきではないか、ということを経験的に申し上げて、私の話を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

開原会長 インタビュー

2004年5月より、東京フルブライト・アソシエーションの会長に就任された、開原成允氏と奥様の久代さんにお話を伺った。ご夫妻は、お二人とも1966年のフルブライターである。今後の東京フルブライト・アソシエーションの活動について、またフルブライトの思い出について語っていただいた。(以下、開原会長、開原夫人と表記する。)

江端貴子 パブリシティ副委員長
1990 M.I.T.

東京フルブライト・アソシエーション会長としての新しい試み (開原会長) 今までは、財界のそうそうたる方が会長をやっておられて、そうした方々でない、会長は務まらないのではないかと考えていました。しかし、私の世代が、ちょうどフルブライト留学生の変わり目にあたります。つまり、私どもの前は、学者だけでなく、会社の方も、留学生としてアメリカに行っておられた。ですから、そういう方々が今、財界の首脳を占めておられます。

ちょうど私の時代ぐらいから、会社の方々があまり行かなくなっていて、ほとんど学者になってしまいました。そういう意味ではフルブライトの同窓会も、少し変わり目にあるかもしれない。財界の方に助けてばかりいただくのではなく、この変わり目を、同窓会も何とかうまく乗り切っていけないかと思ひ、会長職をお引き受けしました。

今までの流れは大事に守っていくのは当然ですが、一つ新しい試みとして行ってみたいのは、今アメリカからフルブライターの方が日本にたくさん見えるわけですね。もちろんそういう方々と交流はするのですが、そういう方々が、何を日本でおやりになったのかということが意外にわからない。それがもったいないと思っているのです。アメリカからのフルブライターの方々は、われわれが気のつかないようなことを研究しておられるんですね。例えば、政治家の秘書になって、日本の政治を自分で体験しながら研究するという人もいます。それから随分昔だけでも、わざわざ京都へ行って舞妓さんになって、その体験を基に日本文化の本を書かれた方もありました。アメリカの

学者は、日本と違って非常に実践的ですね。ですから、交流の場でもいいのですが、その中でどなたか一人か二人、日本でこんな研究をしたというようなことを、話していただいたら面白いのではないかと考えています。

それから、今のフルブライト・アソシエーションの活動に、なかなか若い世代が参画しないという課題があるわけですが、フルブライトの持つ意義が、昔と変わってきていることは事実です。今はアメリカへ行く多くのチャンスがありますから、フルブライトでなければいけないという時代ではなくなったと思います。しかし、その中にあって、フルブライトは、やはり特別なプログラムだと私は思っています。それは、フルブライトは長い歴史も持っていて、日米の太い人的パイプができています。フルブライトで留学すると、その太いパイプの一員になるということ、行かれる方々によく理解していただく必要があると思います。このことを行く前から理解していただくと、帰国後にもその太い人的パイプが色々役にたつことがわかると思うのです。

出産・育児中でのフルブライト留学 (開原会長) 私も家内も、同窓ですが、ただ学年は違って、家内は私の2年下です。ですから、知り合ったのは大学時代で、フルブライトに行ったときは、もう結婚しておりました。若い頃はアメリカにあこがれていましたから、私はインターンとして日本にある米軍の病院でやりました。そのころには、立川に米国空軍病院、横須賀に海軍病院、座間に陸軍病院がありましたが、アメリカの医学が知り

たかったものですから、立川の空軍病院に応募したのです。それが本当に楽しくて、そのときにアメリカの医学の一端を見て、「いつかアメリカへ行かなければいけない」と思ったわけですね。

その後4年間は日本で大学院生活をして、それが終わったものから、いよいよアメリカへ行きたいとあって、ジョンズ・ホプキンス大学の教授を紹介してもらって、そこで、給料をもらいながら臨床と研究をやることになりました。しかし、旅費がなかったので、フルブライトにお願いをしました。そういうケースは医学部の場合には多くて、向こうでそれだけの生活の基盤があるならば、旅費だけはフルブライトであげましょうという制度があり、それに応募する人は多かったですね。

(開原夫人) 夫がリサーチフェローとして、ジョンズ・ホプキンス大学で受け入れられることになった時、私は、ちょうど児童精神医学の勉強をしていた時だったので、ジョンズ・ホプキンスといえば、今、日本でも知れ渡っている自閉症について初めて報告したレオ・カナー教授がおられるところなので、私もこのチャンスを逃がしてはと、当時フルブライト留学に100名の大学院生枠がありましたので、そこに応募したわけです。当時、1月に3時間くらいの筆記試験がありましたが、妊娠5か月の時の受験で、試験の最中に、はじめてお腹でゴソゴソと子供が動いたのを覚えています。筆記試験に合格しますと、今度は面接試験がありましたが、それが出産予定日(実際は大分遅れて出産)にあたりました。あのころは、妊娠していることも、大学では隠すようにして過ごす時代でしたし、面接試験にそんな姿で臨むのは不謹慎と思いましたが、もう隠しようがなく、一目で皆さんがわかるような状態でした。面接の際、こちらは恐縮しながら、質問にお答えしておりましたら、面接官(皆、男性)のお一人が「女性は子供を生むと大変強くなって、いろんなことでかえって倍力が出るから、頑張ってください」と言われて、本当に有難く、ほっといたしました。今でも、お言葉を下さった試験官のお姿が思い浮かびます。

それで夫のほうに先に、6月に米国に行き、私は後から8月19日に生後3ヶ月の長女を抱いて渡米しました。エコノミークラスが一番前の席に、籠をつけてもらい、そこで乳児の世話をしながらの旅で、私は一応医師なので、何の苦もなかったのですが、お隣におられた紳士の方から、「何でご主人も、家族も付き添わないのか」と聞かれて、

傍からみるとハラハラする姿だったのかと申し訳ない気持ちでした。それからハワイでの乗り継ぎ



でハプニングがあったのです。当時、離乳食として私どものお給料からすると大変なお値段だった輸入グレープフルーツやオレンジを無理して購入して搾って飲ませていたのですが、飛行機の中でも同じようにオレンジと絞り器を持参して飲ませていました。そうしましたら、ハワイで検問に遭い、私と子どもだけが捕まってしまいました。オレンジが原因だったのですが、なんでオレンジを持ってはいけなかったのか分からず、搾り器で搾って子どもに飲ませるところを見せて、やっと解放されました。シアトルで乗り換え、ワシントンのダラス空港に着くと、夫が迎えにきていましたので、そのあとは順調だったのですが、まあ、非常にスリルとサスペンスに満ちた留学の旅となりました。

(開原会長) 私も行く時は飛行機の都合でハワイで乗り継いだんですね。ホノルルで半日ぐらい待ち時間がありましたが、ちょっと年取ったアメリカの方が迎えに出てきて下さり、それがフルブライトのボランティアだったんですね。「あなたは半日間あるだろうから、ホノルルを案内してあげる」と言って、自分の車に乗せて半日案内して、最後は自分のうちまで連れて行ってアメリカの生活を見せてくださいました。私はあのときは感激しました。まだアメリカへ行くことは珍しい時代だったので、外国旅行をするのはもちろん初めてです。不安でしようがないときに、親切にされるというのは、本当にありがたく、フルブライトのお陰だと思いました。

(開原夫人) ボルチモアに着いてすぐ、隣人の紹介で黒人のベビーシッターを雇いました。彼女を通して黒人の文化も知りましたし、それから子どもを通してアパートの中の子どもたちとその家庭、アパートは全部ホプキンスの医師の家族が住んでいましたが、皆様といろいろな交流ができました。それから2歳からは、大学病院の中のナーサリーが利用できるのですが、2歳まで待てなく

て、子どもの発育もいいからと、1歳8か月からナーサリーに入れてもらいました。そうすると、ホプキンスで勉強している様々な国や人種の家族と知り合いました。子どもも日々英語を話すようになるので喜んでいましたが、帰国するとすぐ忘れてしまいましたね。

(開原会長) 今から考えると、環境がよくなったからできたのですね。ジョンズ・ホプキンス病院は目の前に医者のためのアパートがあるので、近い方がいいだろうということで、そこに住んだわけです。車が必要なほど離れているところだったら大変だったと思います。

フルブライト留学での思い出 (開原会長) その頃のアメリカの生活は、われわれにとって、人生の出発点でもあり、ある意味では頂点でもあった時代ですから、すべてが思い出といってもいいと思います。子育ての話だの、遊んでいる話ばかりでは、ちっとも勉強しなかったのではないかと恐れそうですが、仕事の話はあんまり面白くないから遊んだ話をします。

向こうへ行ってまずびっくりしたのは、夏休みが長いのです。私のボスの教授が、夏休みになると一月ぐらい休みを取ってヨットに乗ったりして遊んでいるわけです。われわれ医者の日本での生活は、もうほとんど休みは取れませんでしたから、ここでせっかく休みを取っていいのだから取ろうと思っていたら、ちょうどそのころシアトルで学会がありました。そのころは小さなフォルクスワーゲンのカブトムシといわれる車を持っていたのですが、それでシアトルまでドライブしようということになりました。シアトルまで行ったらまた戻ってこなければいけませんから、結局一月かけて、大陸を東から西まで往復することになりました。お金があまりないので、途中はキャンプしようということにして、キャンプ道具を買い込んで、それをフォルクスワーゲンの車の上に積んで、途中キャンプをしながら行きました。子供が一歳でしたので、キャンプ場へ行くと、まずおむつを洗濯して、フォルクスワーゲンの窓に下げておくわけです。そうすると空気が乾燥していますから、あつという間に乾くのです。

旅行はちょうど一月かかりました。ペンシルバニアを通過して、シカゴを通過して、US-90でシアトルへ行って、それから今度はシアトルから南へ下って、最後はUS-40を使って帰ってきたのです。

ど、途中にナショナルパークがいっぱいあるわけです。Mt. Rainie、Crater Lake、それからYosemite、Grand Canyon、Grand Tetonなどですね。それを全部めぐって、そこでもキャンプをしてこんなに楽しかったことはなかった。

(開原夫人) こちらはもう必死でした。零下何度という山でキャンプしたり、砂漠を走ったり、エアコンのない車でしたが、暑さは案外平気でしたが、子どもがキャンプ場で体中蚊にさされたりしましたが、幸い誰も、病気もせずに帰ってこられました。

(開原会長) ミシシッピの途中でキャンプしていたら、真夜中にキャンプ場の人が突然やってきて、「すぐ家に入れ！」って言うのです。なんのことかさっぱりわからないけれど、地下室に閉じこめられました。竜巻が近くを通過するから、危ないから入れということだったのです。さすがにキャンプ場は通らなかつたけれど、近くを竜巻が通ったらしい。また、キャンプ場でいいのは、キャンプをしている人たちとみんな親しくなれて、互いに助けあうのです。

遊んだ話ばかりで恐縮ですが、その次の年の夏休みがまた一月あるので、味を占めたものですか。ヨーロッパへ行きました。家内はそのとき妊娠7か月で、2歳の子供を背負ってですね。

(開原夫人) アメリカ大陸横断とヨーロッパ縦断旅行のスライドがたくさんあるのですが、この38年間に、それをゆっくり見る暇がなくて、1回だけ家族で見た程度です。その時、下の子が、「わたしが写っていない」と文句を言いましたが、「ママのお腹からずっとみていた」と言うと安心したようで、家族4人のきずなをつくった旅となりました。

(開原会長) 日本に帰ってからは忙しくて、フルブライトの試験官は頼まれたりはしていましたが、フルブライトの活動にもなかなか参加できませんでした。偶然、前の事務局長のキャロライン・ヤンさんと親しくなって、フルブライト40周年のときにお手伝いをさせていただきましたが、それがフルブライトの同窓会活動にまた参加するきっかけになりました。フルブライトがなかったら、今の私はないということは、もう本当にそのとおりだと思います。特に、自分が一番仕事の上で充実して、しかもまだ若い時代に、米国生活を体験するということが重要だったと思います。フルブライトプログラムには心から感謝しています。

日米教育委員会 サターホワイト事務局長インタビュー

今年の4月1日に日米教育委員会の事務局長に就任されたサターホワイト氏に、事務局長としての抱負、またフルブライトは人生そのものであるというお話を伺った。

江端貴子 パブリシティ副委員長
1990 M.I.T.

Objectives as Executive Director of JUSEC

The opportunity to lead the Japan-U.S. Educational Commission, the Fulbright Commission of Japan, with a very talented staff of 22 people, considerable dynamism, and a very deeply respected, multi-faceted program, led me to believe that I could make a difference in U.S. Japan relations through educational exchange. I am gratified that all of my prior accomplishments - an academic background with a Ph.D., bilingual capabilities, experience in the corporate world, leadership and management skills - could be seen as a useful foothold to provide leadership to JUSEC. I've only been on the job since April 1st, so it's only just over six months, but I feel that I have now learned the job well enough to chart some directions for the future and I am feeling very good about the position.

My first goal is to deepen the mutual respect and understanding between the U.S. and Japan that has been nurtured through the Fulbright Program for more than half a century. My second goal is to help articulate the need for continued reform of the Japanese educational system. I'm an American citizen working in Japan, but as the Executive Director of a bi-national, educational, non-profit, non-government organization, I feel I may be in a unique position to speak out for continued educational reform, with tremendous respect for the efforts already made by the Ministry of Education, "Monkasho," but with a sense of continuing urgency for educational reform in Japan.

Thirdly, I know that we have a lot of interest on the part of Japanese corporate applicants in business and management issues, and we have many Fulbright MBA applicants. Being able to transition a focus of the Fulbright program towards a more practical educational experience that will help the Japanese economy moving forward is an opportunity we should not miss. Of course, the traditional Fulbright programs of liberal arts, humanities, and social sciences, will continue. But instead of completely resisting the shift, we might instead see the transition of the Japanese economy and needs of the Japanese economy going forward in a more global environment, together with the reforms of the educational system, as an opportunity. What role can we find to bridge the reforms of the educational system to the needs of the changing global economy and Japan's economic growth, to bring these two closer together? I want to be very conscious in articulating this emphasis. Education is not just for education's sake nor for the sake of the individual alone, but for the betterment of society, for the betterment of the economy of Japan going forward. In the end, this is also good for the global economy.

I think a fourth area is the awareness of the Fulbright program and its role in the bi-national relationship. It has been less visible in recent years. I say this not as a criticism, but as a challenge to more vigorously explore corporate financial support. We have been very pleased with the strong support of the Alumni Association and the Fulbright Foundation, but we are seeing a likelihood of reduced funding for our

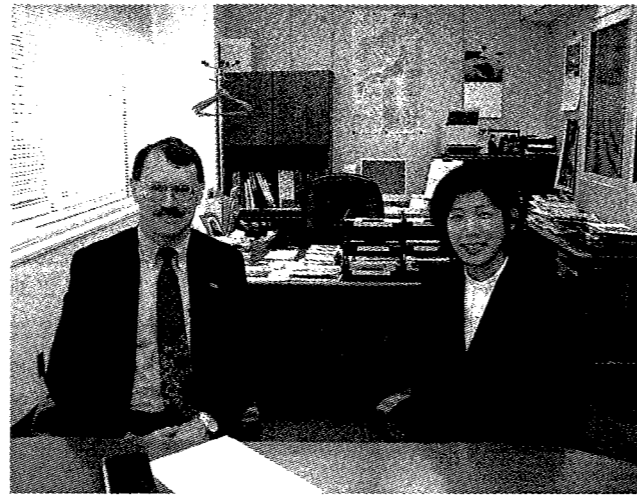
scholarship programs and in this context I want to vigorously explore renewed visibility of the Fulbright program, and thereby, opportunities for corporate sponsorship. For 24 years we have had strong Japanese corporate support. We need to strengthen this even further, as a vital source of scholarship funding, in addition to the bi-national funding from the two governments.

The most interesting part of my job is clearly engaging in stimulating intellectual discussions with sharp, young minds. And I say "young minds," even though many applicants may be more senior scholars. The vibrancy of intellectual discourse is very exciting for me, because it indicates to me that whatever difficulties there may be in the structures and changes of the Japanese universities and the educational system, there are still incredibly bright people coming through the educational system. And we in the Fulbright program get to see many of the brightest.

The challenging side of my position is to articulate, and to actually help facilitate the educational and economic reform of Japan with diminishing resources for the Fulbright program. So, I want to do more, recognizing the challenge that our financial situation will be under increasing pressure with the possibility of fewer grants, but with hopes that we may accomplish even more.

Fulbright program is my life !

My first connection to the Fulbright program took place many years ago, in fact in 1970, when I was 18 years old. I had the great privilege of meeting Senator Fulbright. I had no idea that I would later have a Fulbright grant or be Executive Director of the Fulbright Program in Japan. But those were years in the United States of great debate over U.S. involvement in Vietnam. Senator Fulbright came to the campus of the university in which I was studying and gave a talk. I cannot remember, of course, all of what he said at that time, but he was a man of great stature and spoke with great eloquence. By coincidence, because I came into the meeting auditorium late, all of the seats in the auditorium were



full, except some seats were being added on the stage for the overflow crowd. I was seated one meter away from Senator Fulbright because I was late. I formed a deep impression of the Senator at a time of great turmoil in American society. Senator Fulbright spoke out very eloquently in an effort to lead the U.S. turmoil to a peaceful solution in Vietnam, to get the U.S. out of Vietnam. It's a longer story but well known that President Johnson criticized the Senator for his public opposition to the war. In short, I had the great privilege of meeting Senator Fulbright before I had any idea that I would, later, wear the Fulbright badge. I then devoted about twenty years of my life from that time to human rights and democratization work in the broader effort to bring about a more peaceful world.

Secondly, the Fulbright Program provided me with an opportunity to study in Korea. After three years of coursework for my Ph.D., when I had passed my general exams and was preparing for my actual thesis, I had applied for a Fulbright to Korea from the University of Washington. I was selected and then spent the period of 1986 - '87, one academic year, doing dissertation field work, at the Asiatic Research Center of Korea University in Seoul.

During that time, I was able to interview Mr. Kim Jong-Pil, one of the key plotters of the military coup d'etat of May 16th, 1961. He had subsequently served in many capacities, including Prime Minister, and has been a contender for the presidency as well. It was crucial that I was able to get that interview, but it was because I was a Fulbright scholar that despite a

busy schedule he set aside time to meet with me.

I had an opportunity several times during the Fulbright year to hold discussions directly with the U.S. Ambassador on events not only about Fulbright, but about ongoing political developments in Korea. Our first meeting was supposed to have been a short, standing buffet reception with the Ambassador. It turned into a two and a half hour in-depth discussion, about Korean politics and U.S. policy. This brought the opportunity to have an extensive discussion for more than an hour one-on-one with the Ambassador later in the Fulbright year. I also recall that was the 25th anniversary of the Fulbright program in Korea. Professor Robert Scalapino came to Korea, as the principal guest speaker for the event. Professor Scalapino had a reputation for being fairly conservative as a scholar, but in his public lecture, commemorating the 25 years of the Fulbright Program in Korea, he was very direct in publicly calling for increased democratization of the Korean government. This was quite memorable.

There was a period in June 1987, when for three weeks, there were so many demonstrations for democratization, that tear gas was a measurable air pollutant over the city of Seoul. As a student of politics, I was out seeing hundreds of thousands of people in the streets demonstrating for a return to civilian democratic rule. The Fulbright grant, then, provided me the opportunity for in-depth research and a closer encounter with Korea, by enabling me to complete my graduate thesis and earn my Ph.D.

Overall the Fulbright program is my life. It's not just affecting my life. It is my life, now that I am serving as Executive Director in Japan. I see it as an honor, and a welcomed opportunity to return to the Fulbright program the gratitude I feel. I intend to leave a mark, a positive mark, in revitalizing and invigorating the Fulbright program to continue to make a difference going forward. I look forward to channeling my energies into upholding the spirit of the Fulbright program.

Shepherdご夫妻「感謝の会」—友人としての独断的な報告

小林 明
1988年IEA奨学生、1994-95年大学院奨学生

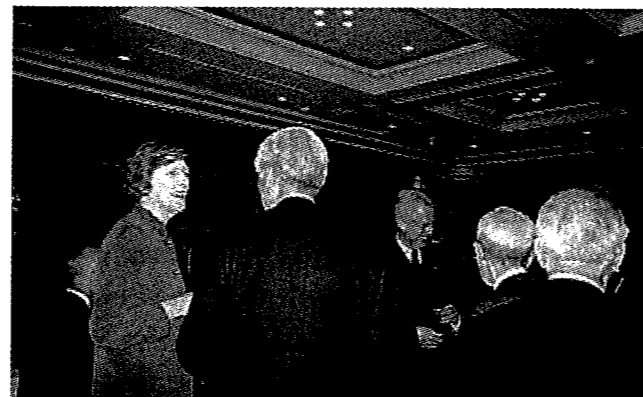
早いものでサム・シェパード事務局長が離任されて7ヶ月が過ぎようとしています。別れは人の常といわれますが、あの「ほんわか」とした雰囲気、彼のいないことに実感が伴わなくて、なんとも不思議な気がしています。

昨年の暮れだったと思いますが、JUSECのホームズさんから久しぶりに電話がありました。事務局から電話があるときは何か協力せよとのことが多いので、一瞬身構えました。案の定「感謝の会」をこぢんまりと開催したいので、個人的にも長い付き合いの自分にやれとのことでした。物腰というか当たりの柔らかなHolmesさんの言うがままに引き受けざるを得なかったのは、確かに長い付き合いだと納得したからです。

「感謝の会」の報告に入る前に、その「長い付き合い」に触れることにします。何故なら、マイルドなコミュニケーションスタイルに隠れた彼の国際交流に対する誰にも負けない強い姿勢と実行力を皆さんと確認し、我々自身、家族、所属機関、地域、日本、そして世界の安寧のために国際交流を推進する努力を怠らないように誓いたいからです。

1988年、ワシントン州タコマ市にあるPacific Lutheran Universityの会議室でした。以前勤務していた亜細亜大学の学术交流大学の一つである同校に学長とともに訪問していたときのことでした。会議室には8名ほどの関係者が招かれていました。会議は昼食をはさんだ小一時間ほどの話し合いであっという間に終了しました。別れを告げて会議室から出たところで「お疲れ様でした。」という日本語が聞こえました。我々以外には日本語の話せそうな人がいない中で、一瞬まわりを見渡すといった状況でした。それがSamとの最初の出会いだったのです。

2日後、学長と私はシアトル・タコマ空港のレ



ストランの一角にSamと一緒にいました。国際教育としての新しい形の英語教育を開発、実施することを考えていた我々は、無理を強いて1時間ほどの会合に時間を割いてもらっていたのです。この時の会合が亜細亜大学フレッシュマン・イングリッシュの源流になるうとは、その時は想像さえできませんでした。しかし、この会合の結果がドライビング・フォースとなったことは事実で、それから1年も経たない1989年4月、Samは23名のアメリカ人講師を引き連れて、武蔵野の地に乗り込んできたのです。大学が依頼者であるにもかかわらず、教授会や大学当局の抵抗と戦わざるを得ない状況があることを理解した上での来日だったのです。その結果1500名の新入生が1年間ほぼ毎日ネイティブ講師から実用英語の授業を受けることができるようになったのです。彼なくしては為していません。

Holmesさんから電話をもらって以来、昨年末に1度JUSECの安宅、伊藤、Holmesの3氏と打ち合わせ会をもっただけでたたき台を作り、後はメールでの情報交換となりました。多くの方々の様々な気持ちをShepherd夫妻が快く受け入れてくれる形で、まして10年間分の感謝を2時間ほどの間に伝えることの難しさを味わいました。しかし、最終的には皆さんが一堂に会し、ひと時を楽しく過ごすことが一番相応しいとの楽観的な結論に達したのです。日本中で様々な送別の宴が開催されたと聞き及んでいますが、その中の一つの様子をご報告いたします。

2月26日当日は、開場時間よりも少し早い出足に待合室として用意した小部屋がすぐ一杯になってしまいました。ホテルの段取りが整うやいなや、予定よりも早くWelcome drinkで開場としました。参加者は、当日出席の方も含めて想像以上の230名余りになりました。準備は万全だと思いながらも、Shepherd夫妻の入場までは緊張の極みでした。受付担当の伊藤さんはじめJUSECスタッフのSam's Angels、スポットライト担当の安宅さん、案内誘導のHolmesさんなど実行委員の皆さんの力で開宴にこぎつけることができたのです。

金子尚志会長（日本電気株式会社名誉顧問）の開会の挨拶あたりまでは、かなり緊張し声が上がっていたようです。社会の様々な分野で活躍されている、普段あまりお目にかからないフルブライトの諸先輩を目の当たりにして、普段さほどあがったことのない自分があがっていることに気づき驚きました。同窓会を代表して頂いた金子さんの挨拶は、Samの人となりをも的確に表現する内容でした。皆さんが同様に感じておられる感情を見事に表現し、感謝の会に列席している我々の心情を代表して頂きました。定石どおりの乾杯では、発声をアメリカ大使館の広報担当公使で2003年度日米教育委員会委員長のHugh Haraさんにお願ひしました。事務局長のSamにとっては、いわば意思決定機関である委員会の長ですから、アメリカ側の上司といった意味合いの方だったのでしょうか。ユーモアたっぷりのスピーチは会場の雰囲気を和らげてくれました。

普通のパーティであれば、乾杯とともに暫くは「歓談ください」となるところですが、今回はShepherd夫妻ができるだけ多くの参加者と話ができるように、またお酒がまわる前に一度挨拶したいという気持ちから、変則的に二度の挨拶を組み込みました。その最初の挨拶では、「日本及び皆さんとの関係は今後も途絶えることはないと思います…、今後どのような仕事に就こうとも国際交流から離れるものではなく、きっと近い将来どこかで仲間として再会できることを確信しています。」というものでした。

時間は不足気味に相当のスピードで過ぎ去っていきました。ご夫妻の挨拶までは正面のステージに注目し、静かに聞き入っておられた皆さんも、

歓談にはいるやいなや挨拶で回るご夫妻を取り巻き、フロア全体が大変賑々しい世界に変わっていました。1秒でも長い別れを惜しもうとされる皆さんの様子を見ながら、鬼になったつもりで歓談時間を早めに切り上げ、ごく親しいご友人の中から「送る言葉」を頂くことにしましたが、マイクを通した声もかき消されてしまうほどの状況になっていました。こうなると司会者といえども立ち入る隙などないほどで、スピーチをお願いした皆さんには少し気の毒でした。



このように騒然とした会場での「送る言葉」の再開でした。まず、国内の関係者の中では故上村和子さん同様East-West Centerを通じて、一番お付き合いが長いと思われる亜細亜大学の馬場房子さんをお願いしました。上村さんの大親友であったことから、二人分の感謝の気持ちを「Samちゃん」という呼びかけに込め、10年間の貢献を称えつつ、今後の活躍と変わらぬ友情を誓われました。

続いて、日米教育委員会の日本側代表としてフルブライト奨学金の運営を支えてこられた文部科学省国際統括官の永野博さんをお願いしました。乾杯の音頭をとって頂いたHugh Haraさんのカウンターパートになる方ですが、出席者は日本人が多いことを承知の上で、Shepherd夫妻がアメリカ人であること、またフルブライト同窓生が中心となる宴であることのご配慮から、あえて英語で準備されたスピーチを頂きました。仕事上でのお付き合いを通じて、Samの国際交流に対する真摯な姿勢に感服されたようでした。

会場がますます賑やかになってきたこともあり、Interview Game: Who's Shepherdで更に盛り上げることにしました。10年間毎日間近にいて「事務局長Sam Shepherd」を誰よりもよく知るところとなったJUSECのスタッフ全員で考えたSamに関する質問をフロアの皆さんに投げかけるという趣向でした。正解が5つになった10名にはフルブライト50周年記念で製作した「日米フルブライト交流計画の50年」ビデオを贈呈し、大変喜んで頂きま

した。会場はSamの新しい一面の発見や再確認できたことへの歓喜の渦でますますの盛り上がりを見せました。

10分の歓談をはさみ3人目の「送る言葉」を50周年記念事業実行委員長であった賀来景英さんから頂きました。50周年という大きな節目とともに苦勞をされた仲間として、Samの貢献を高く評価され、深甚なる感謝の意を表明されました。ゴルフに参加しないにもかかわらずゴルフコンペのたびに甲斐甲斐しく立ち働いたことに対しても敬意と感謝の言葉が伝えられました。

感謝の言葉が続く中で、異彩を放って参加者を魅了したのが、Samの幼馴染としてパンフルートを演奏して頂いたオオエ・モトイさんでした。少し早めにおこしになってリハーサルをされたり、楽器が冷えては美しい音色がでないということでパーティの最中もかなり気を使っておられたりしました。フロアの盛り上がりや司会の不手際で演奏の時間が定まらないことで、ご心配をおかけしたにもかかわらず、演奏では大変美しい調べをご提供いただきました。これで会場の空気が一変したように感じたのは私だけではなかったでしょう。

オオエさんの演奏は、SamのShow Timeに向けて最高の幕開けとなったようです。Samのカラオケ好きは有名ですが、実際に時をともに過ごしてカラオケを楽しまれた方はどのくらいおられたでしょうか。実行委員会では、歌わせたいという気持ちと感謝の会にそぐわないかもしれないという気持ちの間で暫し揺れました。そこで私から送ったEmailの一文をご紹介します。“I have a question for you. Sam, is it really OK with you to sing two songs for us. The songs are "I left my heart in San Francisco" and "Tsugarukaikyo Fuyugeshiki". We have a Karaoke set for you so you don't have to remember the music.”

返事はもちろん、“Of course, I'd be delighted to sing.”でしたが、「本当に僕だけ歌っているの？」という出席者の皆さんに失礼になるのではとの心配があったようです。アンコールはご本人の了解を得てはいませんでしたが、司会者の特権で“Oredyokereba”にしました。酒が進むに連れてConnieさんに捧げる歌だと言ってよく歌っていま

した。

Show Timeが終わるといよいよフィナーレが近づきました。内外から400通を越すメッセージが寄せられましたが、ご紹介できる時間がありませんでしたので、そのまま本人にお渡しし、我々は花束と記念品の贈呈を行いました。記念品はConnieさんの趣味とSamの実益に合わせて、江戸切子の徳利と御ちょこを選びました。日本酒の好きなSamのことですから、きっと飾るだけでなく、実用に供してくれるものと期待しています。

ご夫妻からの御礼の言葉は、意表をついた形となりました。「実は、本日、全米日米協会の会長として就任することとなりました。これですます日本との関係が深まります…」という報告があり、悲しい別れというよりも新しい日米関係のための橋渡しの役割を担おうとしているSam Shepherd夫妻の門出を祝う宴ともなりました。まさに国際交流、日米交流の申し子としての集大成的な環境が整ったものと出席者は一斉に大喝采を送り、祝福したのです。

「自分だけが歌っているのか？」という主人公の心配を払拭するのが実行委員会の最後の役割でした。それなら皆でYou are my sunshineを歌おうとの発案が即座に実行委員会の合意となりました。歌の後、全員でアーチを作り、お二人を会場から送り出したのはほぼ予定の時間だったと記憶しています。お二人は最後の最後まで出席者お一人お一人と言葉を交わすために会場入り口で挨拶に立たれ、見送られました。大変楽しく、心温まる「感謝の会」だったことを報告いたし、偏にご出席の皆さんのお陰と御礼申し上げます。

報告は、もっと文才のある妥当な方が数多くいらっしゃることを承知の上で、再びHolmesさんの口車に乗せられてしまいました。記憶違いなどありましても寛大なるお心でご容赦いただきたくお願いいたします。

■ 総会報告 ■

新会長就任挨拶



開原 成允 新会長

1966 Johns Hopkins U.

最初に少し自己紹介をさせていただきますと、私は内科の医師であります。1966年から1969年の間、フルブライト留学生として米国のボルティモア市にある

ジョンズホプキンス病院に留学いたしました。この時、家内もフルブライト留学生として同じようにジョンズホプキンスで小児精神医学を学びました。帰国後はずっと東大医学部に奉職しておりましたが、今日の私があるのは文字通りフルブライトのお陰ということになります。その点は皆さんも同じかとは思いますが、フルブライトに対する感謝の気持ちはだれにも負けないつもりでございます。

そのため、何とかご恩返しをしたいと思っておりましたが、前の事務局長のキャロライン・ヤンさんから、フルブライト40周年のときに式典やシンポジウムを手伝うようにというお誘いを受け、実行委員の一人として横浜の会合をお手伝いさせていただきました。その時に、私もフルブライトの全体像がよく理解できて、大変楽しく有意義でした。また、各方面のフルブライターの方々にもお会いすることができ、その後も大変お世話になりました。東大を退官してからは、国立大蔵病院長として、「国立成育医療センター」という新しいこととお母さんの病院を創設する仕事に携わることになりました。このため大変忙しくなり、しばらくフルブライト同窓会にもご無沙汰していましたが、その時、小中陽太郎さんからお声がかかり、この病院のことを同窓会で話させていただいたことがあります。お陰さまでこの病院は東京世田谷に立派に完成しました。

現在は、国際医療福祉大学という医師以外の医療専門職を養成する大学の副学長として再び教育に携わっています。

それから今日は、先ほど、私は家内と2人でフルブライト留学をいたしましたということで、家内も出席させていただいておりますので、ご紹介させていただきます。できれば家内と2人で何とかこの会長の役割を務めさせていただきたいと思っているわけでございます。

さて、自分のことはさておき、私がなぜ会長を引き受けたのかということについて一言申し上げたいと思います。実は金子さんが突然私のところにいらっしゃいまして、何回もお薦めいただいたということがあって、お引き受けしなければならぬかという気持ちになったわけですが、それはそれとして、私がそう思ったのは、お手元にある資料をご覧くださいとおわかりになると思うのですが、私が帰国した69年ごろを境にして日本から米国へ行くフルブライト留学生の数が急に減ってきております。また、この後は実業界の方々もフルブライトで留学されることもなくなってしまったと思います。これは、そのときに制度が変わったということがあるわけで、ここに一つの節目があったのではないかなという感じがしているわけです。

ということは、そのような新しい制度になったフルブライト留学生の方々も含めて、これからはこの同窓会を盛り立てていかないと、今後長続きしないのではないかと考えたわけですが、ちょうど私が節目にあるものですから、何らかの橋渡しといえますか、努力をしなければならないのではないかと考えたということが一つでございます。

それからもう一つは、私は大学にいた人間であります。フルブライトで一番お世話になったのは、実は大学にいる人間であります。従って、大学にいる人間が何らかの恩返しをしなければいけないかという気持ちもありました。しかし、これまでの実業界の会長の方々と違って、私は大変非力ですので、果たして務まるかは大変不安なのですが、既に述べたような気持ちでもって何とか務めさせていただきたいと思っているわけでございます。

ただ、私は会長としては欠陥商品であるということが一つございまして、実はゴルフが全くできないのです。できないといえますか、やらないので、チャリティーゴルフの時は困ったと実は思っています。ゴルフの方は皆様にお助けいただいて、私は皆様と交流はさせていただければとは思っております。

そのようなことで、いろいろ欠格事項もある会長ではございますが、ぜひ皆様にご支援をいただきまして、何とか務めさせていただきたいと思っております。幸い、金子前会長もいろいろ手伝ってやろうということをおっしゃっておられますし、南原副会長も引き続きお助けいただくということでございます。小西さんをはじめとして今日ご退任された皆様方も決してフルブライト同窓会を見捨てたわけではないというようにおっしゃっておられますので、また今日新たにご就任いただいた方々と共に、何とかこの同窓会を盛り立てていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

会長退任挨拶

金子 尚志 前会長

1960 U. of California, Berkeley

私、2000年5月より2期4年間、東京フルブライト同窓会長を務めさせて頂いたNECの金子尚志でございます。先ほど御決議頂きましたように、この度退任させていただきます。後任会長には「開原成允(しげこと)氏」をお迎えすることになり、フルブライト関係者にとりまして大変喜ばしいことで、心から開原先生のご活躍を祈るものがあります。

この度退任に当たりまして、一言御礼の言葉を申し上げます。私は、前々会長の行天豊雄様、前会長の橋本徹様からのご命令により、同窓会長の大役を引き受けさせて頂きましたが、この4年間何とか無事役目を終えることができましたのは、皆様の格別のご支援によるものであります。思い起こせば、任期中にはフルブライト50周年記念行事が挙行され、前夜祭には天皇皇后両陛下にご光

臨賜り、また記念式典には皇太子殿下同妃殿下の御臨席を賜りましたことは、一生忘れ得ぬイベントでありました。また、50周年の機会に多数の同窓生各位の記念募金が4千万円の高額に達し、米国からの留学生招聘に寄与できましたことも、大きな喜びでございました。この間、JUSECの前事務局長Shepherdさんを始めとする大勢の方々、同窓会役員各位、並びにフルブライト財団役員各位、正野事務局長他大勢の方々の御支援を頂きましたこと、ご関連の皆様方各位に厚く御礼申し上げます。

さて、後任会長の開原成允先生をご紹介申し上げます。先生は、1966年のフルブライト留学生としてBaltimoreにあるJohns Hopkins Universityに留学されました。帰国後は東京大学医学部教授を勤められ、現在は東京大学名誉教授で、医療情報システム開発センターの理事長並びに国際医療福祉大学の副学長を勤めておられます。フルブライト関係では、先生は40周年記念行事で実行副委員長を務められ、また記念講演をなさっておられます。尚、本日ご出席の奥様久代様には、同じくJohns Hopkins Universityにご一緒に留学され、まさに「おしどりフルブライター」でいらっしゃいます。

本日より開原先生に後事を託する訳であります。この総会から、会の名称も変わり、新しい役員体制も整い、その他活性化施策等も取り入れられ、何かと新しい風を感じております。JUSECのExecutive Directorも、この4月から新たにDavid Satterwhiteさんに交代されました。新風の吹く中、「JUSEC/フルブライト・アソシエーション/日米教育交流振興財団」と、三位一体の協力体制を一層推進されますことを期待して止みません。私も、留学への感謝の気持ちに変わりはございませんので、退任後も陰に陽に活動に協力させていただきたく所存であります。有難うございました。

2004年度総会での各種報告

2004/2005年度役員(敬称略)

- 会長：開原成允
- 副会長：南原 晃(会長代行) 佐藤ギン子
有馬朗人 白鳥正喜 長坂健二郎(新任)
- Alumni Meetings 委員長：日比谷潤子
副委員長：福田 学(新任)
- Hospitality Committee 委員長：太田隆次
副委員長：島田道子
- Publicity Committee 委員長：定森大治
副委員長：江端貴子
- Foundation Liaison 委員長：金田 新(新任)
- 監査役：原田敬美

2003年度決算・2004年度予算(単位:千円)

	2003年度決算	2004年度予算
I 収入の部		
会費	4,588	5,000
寄付金	11	10
受取利息	1	1
募金手数料	977	746
PC賃貸料	240	240
広告料収入	300	300
講演料収入	30	0
当期収入計(A)	6,146	6,297
前期繰越	17,255	17,788
収入合計(B)	23,401	24,085
II 支出の部		
旅費交通費	122	100
通信費	1,411	1,400
印刷製本費	763	600
什器備品費	16	300
光熱費	105	160
修繕費	66	100
消耗品費	27	30
地代家賃	250	250
会費	263	0
倉庫料	83	50
事務用品費	90	100
給料手当	2,216	2,300
奨学生費	537	350
支払手数料	15	10
図書購入費	1	10
会議費	60	100
雑費	0	50
雑損失	0	0
予備費	0	300
当期支出合計(C)	6,025	6,210
当期収支差額(A)-(C)	121	87
50周年記念出版費用(D)	0	0
販売代金入金(E)	-413	0
次期繰越(B)-(C)-(D)-(E)	17,788	17,875

2003年度会務報告

- 03.04.25(金) 三上泰永元都留文科大学教授の遺産贈呈式(於弁護士会館)
[出席者] 内古閑俊二財団理事長 他
- 03.05.26(月) 2003年度総会・講演会・懇親会(於国際文化会館)
[講演者] 小柴昌俊 東京大学名誉教授
[出席者] 会員119名、家族・友人36名、招待者23名、合計178名
- 03.05.27(火) アメリカ人フルブライター及びその家族日光～29(木)・益子ツアー(2泊3日)
[参加者] アメリカ人フルブライター・家族6名、関係者20名、合計26名
- 03.05.30(金) アメリカ人フルブライターのための国会及び最高裁判所見学会
[参加者] アメリカ人フルブライター・家族7名、関係者6名、合計13名
- 03.06.17(火) FMF夕食ボランティア 会員17名協力
- 03.06.24(火) FMF都市同行ボランティア 大田原市に会員1名同行
- 03.06.29(日) ジャーナリスト同窓会(於国際文化会館)
[参加者] 約30名
- 03.07.30(水) アメリカ人フルブライターの成田出迎え 会員1名協力
- 03.08.27(水) 同上
- 03.09.12(金) 同上
- 03.09.16(火) 同窓会事務局、下記新事務所業務開始
〒100-0014
東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビルB135
- 03.10.08(水) FMF夕食ボランティア 会員21協力
- 03.10.14(火) FMF都市同行ボランティア 春日部市・流山市・日野市に会員各1名計3名同行
- 03.10.20(月) FMF都市同行ボランティア 諏訪市に会員1名同行
- 03.10.27(月) 第28回日米交流チャリティーゴルフ大会(於戸塚カントリー倶楽部)
[参加者] 170名 [募金額] 約390万円
- 03.10.30(木) 2003 U.S. Worldwide Fulbright Alumni Seminar に会員2名参加(於ワシントンD.C.マディソンホテル)
- 03.11.12(水) 建築・土木・都市・環境分野同窓会(於国際文化会館) [参加者] 約30名
- 03.11.18(火) FMF夕食ボランティア 会員17名協力
- 03.11.21(金) 2003年度臨時役員会&アメリカ人フルブライター歓迎会(於グランドアーク半蔵門)
[出席者] 会員・家族55名、フルブライター・家族14名 招待者19名 合計88名
- 03.12 NEWSLETTER Vol.16 を発行
- 04.02.23(月) 2003年度定例役員会
- 04.02.26(木) JUSECシェパード事務局長ご夫妻「感謝の会」(於ホテルニューオータニ)
[参加者] 195名
- 04.03.22(月) 金子会長、シェパードJUSEC事務局長、サターホワイト後任事務局長 京阪・中国・福岡地区同窓会歴訪
- 04.03.26(金) アメリカ人フルブライターの成田出迎え 会員1名協力
- 04.03.28(日) アメリカ人フルブライター及びその家族日光・宇都宮ツアー(2泊3日)
[参加者] アメリカ人フルブライター・家族9名、関係者6名 計15名

新任役員紹介

副会長
長坂健二郎
1962 Columbia U.



本年の総会で副会長に選任された長坂健二郎です。当会の副会長を長く勤めておられる南原晃さんから、活動に参加するよう、それまで何回もお褒めを戴いていましたが、なかなか時間を捻出することができず、その都度心ならずもお断り申し上げておりました。

しかし本年初め、漸く後任の社長を選任し、日常業務から解放されましたので、お仲間に入れさせて戴いた次第です。各種会合に参加してみますと、日銀の1年先輩に当る上記、南原さんを首め、白鳥副会長、正野事務局長等々、かねて旧知の方々が数多く居られ、夫々過密なスケジュールを割いて、当会のために汗を流しておられることを知りました。多忙を理由に、永年不参加を続けて来た自分を大いに恥じた次第です。

振り返ってみますと、僅か1年のフルブライト留学ではありましたが、この経験が私のその後の人生に大きな影響を与えてくれました。遅ればせではありますが、これからは開原新会長のもとで、御恩返しのご真似事だけでもさせて戴きたいと考えております。

何卒宜しくご指導、ご叱声の程、お願い申し上げます。

*1935年生まれ・萬有製薬株式会社 代表取締役会長

Foundation Liaison委員長
金田 新
1980 Harvard U.



1980年にトラベルグラントをいただいてハーバードビジネススクールに留学させていただきました。2年間、多くの多様な人たちとの出会いがあり、極めて濃密で、後々までの人生の生き方、考え方を左右させられる良い経験をさせていただいたと思っています。恩義があると感じています。

推薦を受け、深く考えもせず、ご恩返しをする年頃になったんだと、Foundation Liaison 委員長をお受けしました。大局観は間違っていなかったと思いますが、さあ始めの一步となると、五里霧中という感じで、戸惑っているというのが正直なところでした。同窓会の名称の議論も本質は、フルブライト同窓会としてなんとか、ブランド再構築をはかろうという諸先輩の思いの現れだと拝察しています。捨ててゆくのは簡単ですが、作り上げるにはよほどのエネルギーと求心力がいるのだらうと思います。

翻って、隣国での、国、企業、団体、それぞれのレベルでの人に対する投資、とりわけクロスボーダーでの教育投資に対する意志には、常々感心させられています。国の意志を左右するようなことはとてもとても思いますが、フルブライト同窓会会員の皆様、あるいはフルブライトの志しに共感していただける皆様のご支援をえることで、フルブライトグラントであった初心の喜びと感動を少しでも多くの方と分かち合えるようなFoundation Liaison 委員長としての活動ができれば、これ以上の喜びはありません。皆様のご叱正をよろしくお願い申し上げます。

*1948年生まれ・トヨタ自動車株式会社 常務役員

近くなっているとの感じを深めております。今年はフルブライトのTEACHERS PROGRAMにおいてアメリカの公立の学校の先生200名ほど宛てでしょうか、日本の経済についての1時間ほどスピーチを取行させていただきました。フルブライトを通じて得られた異文化の体験を今後とも日米の交流のために役立たせることが出来ればと思っています。

はなはだ微力ではございますが、この大任をお受けいたしましたうえは、東京フルブライト・アソシエーションの発展に全力をつくす所存でございます。何とぞ、前任者同様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

*1955年生まれ・ドイチェ信託銀行ディレクター・コンプライアンス部長

Alumni Meetings副委員長
福田 学
1984 American U.



私ことこのたびAlumni Meetings副委員長のご依頼をお受けしまして、就任させていただきました。

1984年より1986年にかけてフルブライトのお世話になり、ワシントンDCのアメリカン大学に入学してMBA(経営修士号)の課程に進んでからすでに20年の歳月がたちました。現在の勤務先の親会社はドイツの銀行であり、また、数回に分かれますが、合計では足掛け8年ほどのアメリカ滞在をいたしております。

しかしながら、アメリカとの“距離”は毎年着実に

会則一部変更の内容

1. 世界各国のフルブライト・アルムナイのなかで、ガリオアの名を冠する国は日本以外にありません。ガリオア資金(Government Aid and Relief in Occupied Areas Fund)の恩恵に対しては、今後とも感謝の念は抱きながらも、フルブライトの国際交流が活発化している21世紀に相応しい名称として、「ガリオア・フルブライト東京同窓会(Tokyo GARIOA/Fulbright Alumni Association)」から「東京フルブライト・アソシエーション(Tokyo Fulbright Association)」に改め、会則第1条を変更いたしました。

2. 国籍を問わず、日本に滞在し本会に参加を希望するフルブライトおよびフルブライト・プログラムの理念に賛同し、役員会で承認した者を賛助会員とするため、会則第5条につき、所要の変更を行いました。

これに伴い、ゲストとして年会費を免除する準会員(日本滞在中のアメリカ人フルブライト奨学生)以外は、正会員、賛助会員とも一律年会費3,000円とするため、会則第15条につき、所要の変更を行いました。

従来、賛助会費1口年10,000円は、主に法人賛助会員を想定しておりましたが、今後は、(財)日米教育交流振興財団の免税寄付制度の利用を勧め、個人賛助会員数の増加を図ります。

3. 1982年本会結成のきっかけとなり、以来5年毎に継続して行われているアメリカ人フルブ

ライトグラントー招聘のための募金活動を、会則[活動]第6条に明記するため、第2項として追加し、それに伴い、第6条第2項以下を1項ずつ繰り下げました。

4. [役員]第10条の会長、副会長以外の役員の呼称を、実状に合わせ幹事若干名から委員若干名に、また監査を監査役に変更し、会計、書記を削除いたしました。

5. 新たな人材の役員起用を容易にするため、役員の再選回数に基準を設け、会則第11条に、役員の再選回数は、継続して2回を超えない、とする但し書きを加え、実質上の任期継続を最長6年といたしました。

6. 本会の運営につき会長の諮問に答えられるよう、会長が会に功労のあった者のうちから役員会の議を経て顧問を委嘱するため、顧問に関する規定([顧問]第12条)を新設いたしました。

7. 会長の任免により有給の事務職員を置くため、職員に関する規定([職員]第13条)を新設いたしました。

8. [顧問]第12条および[職員]第13条の新設に伴い、会則[会計]第12条以下を2条ずつ繰り下げました。

変更後の会則は、「東京フルブライト・アソシエーション会則」の通りであります。

顧問委嘱について

本年5月26日開催の総会において新設された顧問に関する規定に基づき、8月27日、次の各氏が顧問を委嘱されました。

氏名(敬称略)	橋本 徹	第7代会長(98-00)
渡邊 宏	第5代会長(92-94) (株)東陽テクニカ 常勤監査役 (財)日米教育交流振興財団理事長 (94-96)	ドイツ証券会社 会長
行天 豊雄	第6代会長(94-98) (財)国際通貨研究所 理事長	第8代会長(00-04) 日本電気(株)名誉顧問 前副会長(92-04) J.P.モルガン証券会社 元会長 (財)日米教育交流振興財団理事長 (96-01)
		金子 尚志
		小西 輝明

第1章 総則

【名称】

第1条 本会は、東京フルブライト・アソシエーションと称し、英文をTokyo Fulbright Associationと称する。

【事務所】

第2条 本会は、事務所を東京に置く。

【目的】

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発をはかり、日米親善、および相互理解を増進することを目的とする。

【会員】

第4条 本会の会員は、正会員、準会員と賛助会員とする。

- 第5条
1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティー
 2. 準会員：フルブライト奨学金を得て日本に滞在しているアメリカ人
 3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者

第2章 事業

【活動】

- 第6条 本会は、次の事業を行う。
1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動
 2. アメリカ人フルブライトグランティー招聘のための募金活動
 3. フルブライトその他奨学金を受けて渡米するグランティーへの指導、援助
 4. 日本に滞在するフルブライトグランティーの研究活動、および滞日中の生活への指導、援助
 5. その他日米相互理解を深めるための活動、および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

【総会】

第7条 総会は毎年1回開催する。その他の役員会で必要と認められた時には、臨時総会を開催することができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認
2. 役員を選出
3. その他本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員、顧問および職員

【役員】

第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、委員若干名、監査役を置く。

第11条 任期は2年とし、役員は再選は妨げない。但し、役員は再選回数、継続して2回を超えないものとする。

【顧問】

- 第12条
1. 本会に顧問を置くことができる。
 2. 顧問は、本会に功労のあった者の中から役員会の議を経て、会長が委嘱する。
 3. 顧問は、本会の運営に関して会長の諮問に応じる。

【職員】

- 第13条
1. 本会の事務を処理するために、必要な職員を置く。
 2. 職員は、会長が任免する。
 3. 職員は、有給とする。

第5章 会計

【会計】

第14条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第15条 正会員および賛助会員の年会費は3,000円とし、準会員の年会費は免除する。

【会計年度】

第16条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

ガリオアの消えた日

川平 朝清 1953 Michigan State U



2004年5月26日開かれた総会で、会則第1条「ガリオア・フルブライト東京同窓会」の名称から、「ガリオア」をはずして、「東京フルブライト・アソシエーション」に変更する旨の提案があった。ガリオア奨学金の恩恵を受けたものとして、また、爾来半世紀を生き延びてきたものとして、私はすかさず、異議申し立てをせずにはおられなかった。

こう言ったところで、会員の中には、「ガリオア」っていったい何なんだと反応するむきも多いことであろう。話は、日本が太平洋戦争に負け、ポツダム宣言を受託し、無条件降伏を申し入れ、アメリカを中心とする連合軍に占領された時代にさかのぼらなければならない。ということは、1945年から、1952年までのことである。もっとも、本土のほうはそれでよいのだが、わが郷里沖縄の占領は、そのあと20年間、1972年まで続いていたことを付記しておきたい。

ガリオア GARIOA は、Government Aid and Relief in Occupied Areas Fund の略で、まさしく日本が占領されていた地域であったとき、その住民の飢餓や、疾病などによる不安を防止し、占領行政の円滑化を図るために、アメリカが支出した援助資金のことである。1949年になって、この資金の中から奨学金が割り当てられ、戦禍癒えやらぬ地から、留学する機会を得た。

当時、アメリカそして連合軍によって占領されていた国といえば、かつて三国同盟による枢軸国と称された、ナチスドイツ、ファシストイタリア、大日本帝国、オーストリアの四カ国であった。

会から送られてきた総会報告によると、『世界フルブライトアルムナイの中で、ガリオアの名を冠する国は日本以外にありません。ガリオア資金の恩恵に対しては、今後とも感謝の念は抱きながらも、フルブライトの国際交流が活発化している21世紀に相応しい名称として、「ガリオア・フルブ

ライト東京同窓会」から「東京フルブライト・アソシエーション」に改め、会則第1条を変更いたしました。』とある。同じ被占領国のドイツ、イタリア、オーストリア以外にはガリオア資金は適用されていないので、その3国の状況を把握された上で、「ガリオアの名を冠する国は日本以外にない」と言われているものだと思うが、私の偽らぬ気持ちとしては、かつてoccupied areasの一つであった時代の、あの「悔しさ」と、「悔い改め」の気持ちと、総会報告にも記されている「恩恵」と「感謝」の気持ちを忘れないためにも残しておいてもらいたかった。昨今のフルブライトの中には、奨学金を己の能力によって得た特権とみなし、エリート意識をちらつかせる者もいると聞いているだけに…。

『もうひとつの日米関係—フルブライト教育交流40年』（近藤健著、ジャパンタイムズ社刊）によると、ガリオア留学生が、日本本土から選抜され派遣されたのは、1949年から1952年までの4回のみで、総数1,145名となっている。1998年発行の同窓会名簿には、沖縄出身も含めて974名のお名前が載っているから、かなりの方々のご健在であり、中には現役で活躍しておられる様子もうかがえる。

一方、1952年から一部始まったフルブライト留学生は、半世紀を過ぎてその数はゆうに6,500名を超えた。かなりの年配となったガリオア留学生は、いまやマイノリティーであることは事実である。従って、総会、歓送迎会などの諸行事への出席もまばらとなってきた。今度の総会でも、私が異議申し立てをした時、“ガリオア留学生の方は？”と挙手をお願いした際、手をあげた方は5人には満たなかった。

私達ガリオア世代はいわゆる「戦中派」である、私自身を含めて、大日本帝国陸・海軍に身をおいたものもいた。私など、ラジオ、テレビを一から学ぶために留学したミシガン州立大学で、レジストレーションの際、“すべてのフレッシュマンは、veteran（退役軍人）でない限り、ROTC（Reserved Officers Training Course）「予備将校訓練コース」は必修である”と言われ、“私は日本帝国陸軍を退役したveteranである”と答えて、コースを免除してもらったことがある。もともと外国人留学生には適用されないコースだったのだが、新任の担当者がよく知らなくてこうなったものであった。周りにいた朝鮮戦争からの帰還兵達と一緒に笑ったことが昨日の事のように思

い出される。日米あい戦って8年目の事であったが、お互いに恩讐を越えて笑い合える状況になっていたといえよう。

われわれの世代は、戦後学制が変わったために、卒業した小学校や、中学校、はては旧制高等学校、専門学校、師範学校などの名前まで変わったり、中には消滅してしまった経験の持ち主が多くいる。従って、同期会や、同窓会に行くと、この1年のうちに亡くなった人たちの冥福を祈る黙祷ではじまり、参加者が年々少なくなっていく寂しさを感じている向きも多いはずだ。中には、会自体も存立の危機を迎えている場合もある。ガリオアのみの同窓会なるものがあつたとすれば同様な運命を辿ることになったであろう。

1952年日本の独立回復後も、アメリカの占領下に置かれた沖縄では、ガリオア留学制度は継続された、数年後にARI (Aid to the Ryukyu Islands) 奨学金と名称は変わったが、施政権が返還されるまでに、1,100余人がその恩恵に浴した。人口比でいけば、沖縄からのアメリカ留学の機会は多かったことになる。『沖縄大百科事典』によると、留学したものの中155人が学士号を、262人が修士号を、28人が博士号を取得している。従って、よもやガリオア・フルブライト沖縄同窓会の名称から、ガリオアが消えることはないであろうと願っている。

ガリオア「老」留学生諸君、時代を反映してガリオアの名は消えたが、われわれは命ある限り消え去ることなく、会費を払い、諸行事に参加し、「東京フルブライト・アソシエーション」の発展と、後輩達の活躍を祈ってサポートしつづけようではないか。同時に、皆さんのご健勝も心からお祈りする。

名称変更のいきさつ

パブリシティ委員長 定森 大治 1973 Columbia U.

東京フルブライト・アソシエーションへの名称変更を提案した張本人は私です。昨年春の役員会で、今後の活動計画が話題になったとき、「名称変更が必要ではないでしょうか」と持ちかけたのです。そのときは、ガリオアの名を外すのが目的ではなく、「何とか同窓会」という名称は世間にあふれているので、簡単なネーミングで、しかも全員が帰属意識を共有できるようなものがない、と提案しました。

今春の総会でも数人の方が発言されたように、ガリオアという名へのこだわりがあるのは当然だと思います。敗戦国ニッポンをどう復興させるか、それぞれの夢と期待、そして自尊心を抱いて青春のひとつときをアメリカ留学に賭けた諸先輩の人生は、われわれ戦後世代には真似のできない貴重なものだったと確信しております。また、同窓会を発足させるために、並々ならぬ努力をされた方々には、いまでも深い敬意を抱いております。

名称変更には、加入率がそれほど高くない若い世代を引き寄せ、幾世代も続くアソシエーションにしてゆければ、との期待が込められています。フルブライトの名さえ知らない世代も育っていません。ガリオアであれフルブライトであれ、教育交流の重要性を説いた故フルブライト上院議員の世界観を共有してきたことでは、同じ土俵の上には立っています。

この原稿を書く前、ガリオア留学生として同窓会活動に尽力されてきた東陽テクニカ常勤監査役の渡邊宏さん（'51 インディアナ大）と電話でお話ししました。「ノスタルジーは残るけれど、大勢がそういう流れであれば、やむを得ない。名称変更には消極的に賛成する。いろいろがんばってください」。

「恩返し」同窓会を発展させ、みなさんの知的財産を活用して日米関係を機軸にしたテーマで勉強会をやりたい、アメリカや各国のフルブライターたちとの交流も深めたい、など、構想はあれこれ出ています。国際社会の合い言葉である「持続する成長」を、東京フルブライト・アソシエーションにも当てはめられるよう、みなさまのご協力をお願い申し上げます。

ご紹介——九州フルブライト同窓会の巻

九州フルブライト同窓会会長 原口三郎

1975 Cornell U.

1982年に設立された九州同窓会の会員数は、現在、九州在住の日本人フルブライト同窓生の総数186名中、154名を数えます。

九州の人口は約1,300万人で日本全国の約10%であるために、九州人はこの10%の線を基準にして全国との比較をしがちなため、私はこのことを冗談めかして「10%症候群」などと名付けたことがあります。福岡には年6回の大相撲がやって参りますし、またプロ野球12チーム中、ダイエーのフランチャイズもあり何となく安心しているわけですが、全国のフルブライト同窓生の総数に較べますと、九州地区の同窓生は多いとは言えず、フルブライト的頭脳が関東地区に集中していると感じざるを得ないところです。

それはともかく、九州同窓会が発足しました際、幸いなことに、田中健蔵九大学長(当時)と福岡銀行頭取(後の福岡商工会議所会頭)山下敏明氏(ともにフルブライト同窓生)がおられたため、福岡七社会(福岡の主たる7企業)のご協力を得て、私たちは「九州冠奨学金」を創設し、全国同窓会派遣の留学生の他に、毎年1名のアメリカ人留学生を九州の地に呼び、学んで貰って来ました。第1回の奨学生のイエーツ君は、その後インディアナの大学の日本語センター長となり、毎年かの地の教師たち20数名を日本に連れて来て教育していますし、また江戸文学の研究者として来福したキャンベル君は現在東大総合科学部の助教授になっています。

このように私たちの活動の中心には派遣講師と交換留学生の制度が二大柱としてあったと言えます。もちろん年次総会を中心とするジャンルの違う老若男女の留学体験者たちの日頃の交流は、懐旧の中にも精神のリフレッシュの場として、他



では得難い貴重なものです。

最近では経済の急変により国際関係は複雑に多様化し、九州の各大学のキャンパスには中国、韓国、東南アジアの留学生たちの声がどよめいています。

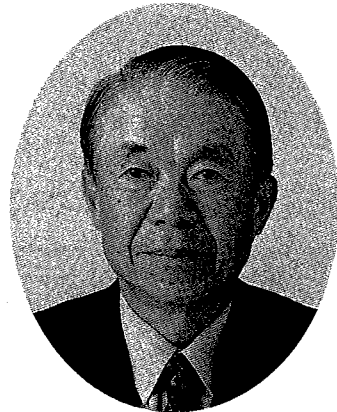
しかし終戦直後に発足し、一番古くて制度的にしっかりしたフルブライト交換留学制度の基軸はこれからも堅持すべきだと思います。そしてその精神の根幹にある国際親善の草の根の活動はさらに一層張り広げていかざるべからざるものと存じております。

最後に全国のフルブライト同窓生のご活躍を祈るものです。

第29回日米交流チャリティゴルフ大会

南原 晃

会長代行副会長
1961 Yale U.



「一に天気、二に仲間、三、四がなく、五にスコア」とよく言うが、これは、思うようなゴルフが出来なかった負け惜しみだと、真剣なゴルファーはおっしゃるだろう。しかし、今回ばかりは堂々と

使わせて頂きたい。今年の標記大会は、11月1日(月)戸塚CCで開催されたが、当日は朝6時近くまで雷鳴とどろく豪雨、天気予報も雨があがるのは午後ということだった。それがどうだろう、スタート時には完全にあがり、暑くもなく、寒くもなく、170名強の参加者が絶好のゴルフ日和を満喫した。そして、アマチュアゴルファーの楽しみは何といっても19番ホールのパーティー。新任のサターホワイト日米教育委員会事務局長の司会は、前任のシェパードさんに負けず劣らず、完璧な英語、日本語双方を駆使して素晴らしく、また、日本女子プロゴルフ協会の樋口久子会長がボランティアとして来て下さり、82年の第一回大会から大会実行委員をされている荒井好民(株)システムインターナショナル会長の質問にユーモアたっぷりに答えていただき、会場は大いに盛り上がった。席上、この大会の収益金4百万円余の目録が、開原成允同窓会長から、賀来景英日米教育交流振興財団理事長に贈呈された。また、表彰は、内閣総



理大臣杯が日本側実行委員長の宮内義彦オリックス(株)会長から安西雄丈萩原企業株式会社社長に、駐日米国大使杯は、米国大使館スコットスミス担当官から、何と、同窓会長、大会実行委員長を歴任された故川村先輩のご子息である川村竜司日辰貿易株式会社常務にそれぞれ手渡された。そして全員、多くの企業、団体から寄せられた賞品を手にして解散した。

私が毎年この大会に参加して感動するのは、フルブライト留学と直接関係ない日米財界人ないし団体役員が、我々の、米国人への奨学金支給のための募金活動の趣旨を良く理解されて、実行委員長、実行委員を引き受けていただいていることだ。米国側の実行委員長は在日米国商工会議所のトップになっていただき、今年も、ホワイトアンドケース法律事務所のグロンディンさんに務めていただいた。特筆したいのは、故小山先輩と共にこの大会を発案された米国在住のGロバートベイカーさんが毎年ご友人を伴い来日参加されていることである。一方、日本側の多くの実行委員にはプレー参加だけでなく、大会運営のためのスタッフも派遣していただき、これが大会を支えている。記念すべき来年の第30回大会は10月17日(月)を予定しているが、その直前には戸塚CCで日本女子オープンゴルフが開催されることでもあり、昨年から参加費値下げ(4万円、うち寄付金2万円)で復活し始めた参加者数の一段の増加に向けて、皆様のご協力をお願いしたい。

フルブライト1974、84、94年 同期会報告

原田 敬美 監査役・日米教育交流振興財団副理事長 1974 Rice U.

2004年11月19日(金)午後4時半から1時間、東京千代田区グランドアーク半蔵門において、1974、84、94年度の同期会が開催されました。留学後10、20、30年経過した節目の期です。74年3人、84年2人、94年2人合計7人参加しました。時代背景を大統領名で表すと、74年ニクソン辞任、フォード就任、84年レーガン、94年クリントンと言う時代でした。

自己紹介をしながら各人5分程度、留学時代の思い出話をしました。参加者の留学先は東部4人、中西部1人、深南部2人でした。話題で盛り上がったのは、トラブルに遭った話し、フルブライト留学のありがたさなどで、勉学の話題はあまり出ませんでした。

トラブル編では、「交通事故に遭った」「チェックインしたスーツケースが空港で見つからなかった」「子供が熱を出して救急車で運んでもらった」「30ドルの金銭トラブルでスモールズクレイムコート(日本の簡易裁判所)へ法律知識は全く無いのに自ら訴状を書き裁判を起し勝訴した」、生活苦勞編では「出産」「子供を保育園や学校へ入れた」「経済的に苦しくスーパーでなまず一山いくらかで買った」、貴重な体験編では「大型車を日本では乗れないのであえてクライスラーロードランナーを買い乗り回した」「500ドルで大型車を買って全米中を45日かけドライブし、アメリカの巨大さを認識した」「犯罪多発の大都市に留学し大学のオリエンテーションで警察署長が学生の安全を全力で守ると挨拶があったので、逆説的に要は治安がひどい状況にあるということかと不安になった」、フルブライトの恩恵編では、「スピード違反の際フルブライトの身分証明書で見逃してくれた」「アパート探しで不動産がフルブライト留学生と言うことで親切にしてくれた」、アメリカ再評価編では「ニクソン大統領弾劾裁判でアメリカ民主主義を認識した」、その他「世話になったホストファミリーや指導教授と現在もお付き合いをしている」「3年で博士論文を書き上げることができた」「指導教授だった方が学生を引率し来日、学生に講義してあげ、恩返

しができた」「アメリカ留学を1年で切り上げその後イギリス留学をしたらそこでまたアメリカの時の教授が教えに来ていて面食らった」などで話題が尽きませんでした。

参加者全ての思いはフルブライト留学に感謝。青春時代を振り返り、楽しいひと時でした。トラブル解決ハウツーは後輩たちに役立つのではと思いました。これからも同窓会に是非お気軽にご参加下さい。

出席者 74年濱四津尚文 浜四津法律事務所(サザン・メソジスト大学)、原田敬美 都市政策研究所(ライス大学)、横田信武 早稲田大学(コロンビア大学)、84年福田学 ドイツ信託銀行(アメリカン大学)、巽孝之 慶應義塾大学(コーネル大学)、94年牟田昌平 国立公文書館アジア歴史資料センター(国会図書館)
庄司貴行 立教大学(シカゴ大学)(同期会幹事: 原田、福田、牟田)

ホスピタリティ委員会活動

アメリカンニューグランティー歓迎会

太田 隆次 ホスピタリティ委員会委員長
1967 U. of Wisconsin

2004年度のアメリカンニューグランティーの歓迎会が、島田ホスピタリティ副委員長の司会で、ニューグランティーと家族、外務省、アメリカ大使館、奨学金を寄附して頂いたスポンサー企業



やその他ご協力頂いた企業や個人、日米教育委員会、同窓会員と家族など114人が集まって、2004年11月19日午後6時から昨年好評だった国立劇場近くのグランドアーク半蔵門で開かれました。

まず南原会長代行から、体験をまじえつつ相互理解の役割を果たしてきたフルブライト計画の意義を強調された歓迎の挨拶がありました。

続いてモーガンアメリカ大使館広報担当公使による乾杯の後、直ちに懇談が始まりました。やや時間をおいてサターホワイト日米教育委員会事務局から4月にシェパード前事務局長の後任として着任したとの挨拶の後、恒例により本年度のニューグランティーから自己紹介と専門分野や留学の目的を話して頂きました。時々サターホワイト事務局長がユーモアをまじえて補足しました。

その後、ご来賓の方のお名前と所属を司会者から名前をお呼びし挙手して頂きました。

次に、日本文化の紹介として、本年度の歓迎パーティの特別アトラクションとして、沼本嘉幸さんによる「柳の雨」の日本舞踊がありました。「柳の雨」は、ハリス日本初代公使とお吉の伝説を歌と踊りにしたものです。

1853年にペリー提督が来航、翌1854年に日米和親条約が結ばれたのを記念して、昨年2003年から本年2004年にかけて、日米150周年行事が両国間で多くの行事が開催されています。その一環として在ニューヨーク日本総領事館はホームページでハリスの人となり業績を大きく取り上げています。

本年度の歓迎パーティで、ハリスゆかりの日本舞踊をニューグランティーに披露出来たことも、ささやかながら意義があったと思います。

終了予定の午後8時になって、私が日本式の一本締めで「中締め」をして閉会を宣しましたが、8時半になっても立ち去り難い人々の輪があちらこちらで出来、いつまでも話が弾んでいました。

裏表紙の写真は、サターホワイト日米教育委員会事務局とニューグランティー達と沼本さんの日本舞踊です。ボランティアで踊って頂いた沼本さんに厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、ご参加者に持ち込み用にウイスキー、ワインのご寄贈をお願いしました所、多くの方々からご協力を頂きました。改めて御礼申し上げます。

日光旅行報告書 (2004年3月28日~30日)

島田 道子 ホスピタリティ委員会副委員長
1957 U. of Minnesota

昨年度は気候が良からという観点で5月末に行ったが、年度末にも当たり、ペーパーやレポート提出が間に合わず、急遽キャンセルするフルブライターが多かったため、今年日本の春休みに当たる3月末に旅行を計画した。毎年の益子焼見学を変更して、キリンビール、及びホンダの工場見学を行った。参加者は2家族4人の子供を含む9名であった。



3月28日(日)

午前9:45分発の「快速ラビット」で宇都宮に向かった。上野への参加者は、上智大学での客員研究員のジュリア・アンドリュースさん一家で、夫の沈揆一成氏は日本学術振興会の特別研究員で、



ご夫妻とも美術史専攻である。高校と中学へ行っている2人の息子さんを加え、車中での会話は大変楽しかった。

宇都宮駅で、京都から新幹線で到着した国際日本文化研究センターのウェラン・クリスタル氏と合流し、歓迎ランチが行われたホテル東日本宇都宮内にある日本料理店に向かった。

京都大学でアメリカ史を教えているロン・クラシゲ氏は仙台から、ご夫人と2人の息子さん(5歳と4歳)は京都から夕方5時に到着したのでこの日のプログラムには出席せず、直接ホストファミリーの家へ行った。

午後は裏千家茶道教室の斎藤宗琢氏のお宅へ伺い、お手前を拝見し、お茶をいただき、先生のお話を伺った。フルブライターは勿論だが、その2人の息子さんも非常に熱心に話を聞き、お茶の作法を一生懸命学ぼうとする態度には感心した。

その後2階へ上がり、先生の奥様の日本舞踊を見せていただいた。5時過ぎ、コンセーレ・ホテルに行き、ホストファミリーと対面し、それぞれの家に別れていった。

3月29日(月)

午前9時にコンセーレを出発し、チャーターバスで日光へ向かった。今回も国際観光振興会の野中忍氏('62 U. of Washington)が案内役を引き受けて下さり、いろんな資料を揃えて準備して下さったので、フルブライター達は大変喜んで感心したりしていた。いろは坂を通り、戦場ヶ原で記念撮影をし、華厳の滝を見て、大正天皇(当時皇太子)のご静養地として造営された日光田母沢御用邸を見学した。ここは30分の予定だったが、美術史専攻の先生ご夫妻がとても熱心に写真を撮ったり下さり、1時間以上かかってしまい、昼食の予約をしていたため、少々慌てた。

午後は東照宮のみを見学したが、ここでもフルブライターは大変熱心で、野中先生のご説明も非常に行き届いていたので、皆大変満足したようであった。しかし、帰宅時刻が遅れ、ホストファミリーに電話をしたりと「いっくら」の長門会長にご迷惑を掛けてしまった。

3月30日(火)

午前中は高根沢町にあるキリンビール栃木工場へ行った。全てのプロセスがオートマチックで、人間が全くいないのには皆びっくりしていた。興味を引いたのは、エジプトの壁画からヒントを得て作った古代エジプトのビールだった。小さなグラスに1mmぐらいの古代ビールを試飲させてもら

ったが、それだけで2,000円のコストがかかっていると聞いて驚いた。味はビールと言うよりアルコール度の高いウイスキーのような感じだった。工場見学の後「一番搾り」と「キリンラガー」の試飲がおつまみ付きであり、希望者は益子焼の絵付けも出来、一同大いに楽しんだ。

午後からは本田技研の栃木工場を見学したが、ここでは高級スポーツカーが生産されているのだが、工程は全てマニュアルで、それぞれの部品が全て人の手で設置され、塗装されているので、沢山の人が工場内で働いていた。しかし、この工場も3月末で千葉へ移転するとこのことだった。

午後4時に宇都宮駅で解散した。今回も「いっくら」長門会長をはじめ、沢山の会員の皆さまが親身になってお世話して下さい、フルブライター達もとても満足したと言ってくれたので、本当に良かったと思う。

国会議事堂見学

島田 道子 ホスピタリティ委員会副委員長
1957 U. of Minnesota



5月27日フルブライター11名を含む総勢14名が参加し、午前10時、衆議員津島雄二氏('55 Syracuse U.)の秘書毛利智美さんに案内され、議事堂内を案内していただいた。その後、議事堂正面へ出て、正面から見て左側

が衆議院、右側が参議院であることなどの説明を受けて、記念写真を撮る。

11時より議員会館へ移り、2階の会議室で津島議員との会見があった。津島議員はまず日本の政治体系がアメリカ合衆国よりも英国の議会方式に類似しており、参議院はアメリカの上院とは性格的に随分異なり、むしろフランスに似ているなどと全体の概要をアメリカの学生に分かるように丁寧に説明して下さい。

学生の質問も歓迎され、現在一番の論争点は年金問題であると指摘された。年金についても他国との比較や数字を挙げて詳細に答えておられた。外交問題では、経済発展を続けるアジア諸国、アメリカ、ヨーロッパの国々とはますます緊密にな

っていくので、日本はどこに重点を置くかを充分考えなくてはならないと述べられた。中国と台湾の関係も質問に挙げたが、困難な問題で、未だはっきりとした回答は見出されていないとおっしゃっていた。

日本国内に関しては、28年の長い議員生活で、地方と首都圏を何回も往復しているが、交通の便が非常に発達し、飛行機などで短い時間で往復ができること、またテレビなどの報道で地方と都会の格差が殆んど無くなったことなどを挙げられた。個人的なことだが、と前置きされ、アメリカの上院議員は100名ほどの職員を持っているのが羨ましいと言われ、日本の公設秘書は3人だけしかいないこと、少なくとも10名は欲しいと言われ、出来れば10名ほど地方在住職員もいたらよいと思うとおっしゃっていた。

アメリカン・フルブライトの種々の質問にも懇切丁寧に答えて下さったので、一同大変喜び、今日ここに来て本当に良かった、今日一日で日本全体の概要が全部頭に入ったと言っていた。

お忙しい中を、時間を延長して話して下さった津島議員、および秘書の方々へ、私からも紙上をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

米国人グランティ一等の最高裁判所見学

高澤 廣茂 日米教育交流振興財団監事
1966 U. of Utah

最高裁判所の御配慮により、今や恒例ともなった同裁判所の米国人グランティ等による見学は、本年は5月27日(木)午後に行はれた。

参加者は、グランティ9名の外東京フルブライト・アソシエーション役員、補助者等で合計15名



であった。

見学内容、コース等は例年通りで、先ず濱田邦夫最高裁判所判事(65 Harvard U.)を表敬訪問、小会議室における英語版ビデオによる裁判所・裁判制度に関する解説、英語による質疑応答、大法廷、小法廷、非公開の図書館等の見学が行はれた。

濱田裁判官は、フルブライト留学出身者であり、流暢な英語で半時間に亘りグランティーに対し応対して下さいました。

一般的な見学と異なり、裁判所は、格別の便宜を提供下され、グランティーにとっては実り多き行事と思われるので、更に多数のグランティー等の参加を期待してやまない。

ホスト・ファミリー制度

島田 道子 ホスピタリティ委員会副委員長
1957 U. of Minnesota

本年度から、アメリカ人ニューグランティーを対象とするホスト・ファミリー制度を導入しました。会員の皆様もアメリカ留学中、異国で心淋しい時に、家庭的雰囲気の中で接して下さったアメリカのホストの方々による心遣いで、どんなに勇気付けられ、うれしい思いがしたかというご経験をお持ちだと思います。

皆様のご都合もあると思われましたので、希望者を募り、出来るだけ専門分野や同じ大学出身の方を紹介するようにしたのですが、なかなかうまくいかず、全く専門の異なる方をお願いするようになってしまいました。また、グランティーの人数に対し、幸いなことに多くの希望者がありましたので、一人のグランティーに二組のホスト・ファミリーをお願いした場合があります。

期間は、来日から翌年夏の帰国までの約一年間で、双方の都合の良い時に、自宅に呼んだり、食事や名所案内をしたり、時にはウィークエンドのホームステイなど、自由に、双方に負担にならない程度にお手伝いしていただくことになりました。ホスト・ファミリーの方には、これをしなくてはならないという条件はなく、最低一年に1~2度ぐらい会っていただき、食事を共にしたり、話を聞いてあげて下されば、グランティーもきっと心強いと思います。

本年度は下記の方々がホスト・ファミリーになって下さることになりました。紙上をお借りして御礼申し上げます。本年度末にはホスト・ファミリー、およびグランティーの方々に感想を聞き、

改善するところなどご指摘いただきたいと思っています。出来れば、来年度以降も続けていきたいと思っています。

ホストファミリー

氏名(敬称略)	留学年数	留学先	専攻	guarantee	出身/受入大学	専攻
島岡 丘	1958	San Francisco State U	Teaching English as a Foreign Language	CULVER, Annika A.	U. of Chicago/早稲田大学	Modern Japanese Intellectual History/ Japanese History
渡部 一元	1958	U of Chicago	Social Science	EMMERICH, Michael D.	Columbia U./国文学研究資料館	Japanese Literature/Japanese Literature
前田 典彦	1960	U of Pennsylvania	International Economics	HEUSCH, Barrett J.	U. of California, Berkeley/国士館大学	Premodern Japanese Literature/ Japanese Literature
佐々木 久雄	1962	New York U	Communications & Journalism	HAN, Eric C.	Columbia U./東京大学	East Asian Languages and Cultures/ Japanese History
開原 久代	1966	Johns Hopkins Hosp	Child Psychiatry	EMMERICH, Michael D.	Columbia U./国文学研究資料館	Japanese Literature/Japanese Literature
小島 武司	1966	U of Michigan	Civil Procedure Law	HAN, Eric C.	Columbia U./東京大学	East Asian Languages and Cultures/ Japanese History
田島 穆	1967	U of Pittsburgh	Teaching English as a Foreign Language	MacDONALD, Laurence J.	U. of Maryland/東京大学	International Education Policy/Educational Sociology
賀来 景英	1968	U of Chicago	Economic Theory	PARK, Gene	U. of California, Berkeley/財務省	Political Science/Political Science
原田 敬美	1974	Rice U	Architectural Design	CULVER, Annika A.	U. of Chicago/早稲田大学	Modern Japanese Intellectual History/ Japanese History
和田 昭穂	1983	U of Michigan	International Economics	NOGUCHI, Sharon A.	San Jose Mercury News/東京大学	Editorial Writer/Others, Social Sciences
宮川 圭治	1986	U of Pennsylvania	Banking & Finance	PARK, Gene	U. of California, Berkeley/財務省	Political Science/Political Science
江端 貴子	1990	MIT.	Business Management & Administration	WHITELAW, Gavin H.	Yale U./	Anthropology/Cultural Anthropology
森 哲郎	1993	Yale U	Natural Resource Economics & Policy	NOGUCHI, Sharon A.	San Jose Mercury News/東京大学	Editorial Writer/Others, Social Sciences
岩崎 里美	1995	Columbia U	International Relations	SHETTLE, Sheila CA	New School U./東京大学	International Relations/International Relations
藪根 正巳	1959	U. of Texas	Chemical Engineering	SHETTLE, Sheila CA	New School U./東京大学	International Relations/International Relations

鎌倉ウォーキングツアー

島田 道子 ホスピタリティ委員会副委員長
1957 U. of Minnesota

11月23日は絶好の秋晴れで、総勢33名(アメリカン・フルブライト及び夫人が7名、日本人会員及び夫人が26名)が北鎌倉駅に午後1時に集合し、鎌倉在住の堀江昭氏(1952 U. of Colorado)と濱田利郎氏(1969 Columbia U.)の案内で、まず駅のすぐ背後にある円覚寺を訪れた。仏殿をはじめ、広い境内を見学した後、150段はあるかと思われた階段を登り、1301年北条貞時が国家安泰を祈って寄進した国宝の洪鐘を見学した。山の上から向こうに見える、北条政子が建てたといわれる「かけこみ寺」などを眺めて、再び階段を降りる。

その後、歩いて建長寺へ向かい、濱田氏が事前

にアレンジして下さい、通常は入れない県重要文化財の法堂に入ることが出来た。そこで永井氏(住職)から建物、天井の龍の絵などの説明を受け、大変興味深かった。また、禅寺を象徴する庭園を見学し、簡素の中にも池の中に島があり、石や松が美しく配置された瀟洒な名園を楽しんだ。

更に次の見学地である鶴岡八幡宮まで歩き、横



の入り口から本殿へ向かった。丁度休日と重なり、また七五三のお参りで大変な混雑だった。可愛い着物や羽織袴の子供達を見ながら正門へ向かい、小町通を通過して、鎌倉駅に近い夕食の場所「和民」へ到着した。

堀江氏の努力で、なかなか予約の取れないところを無理して取って下さり、迷子も出ず、全員無事に予定の5時に到着することが出来た。ビールで乾杯し、鍋料理を囲んで、その時まで日本人同士も親しくなり、英語と日本語が飛び交う楽しい夕食会だった。サービスの娘さんが「皆さん随分英語がお上手ですね」と感心していた。食後自由解散。

お寺の境内は広いし、車はすごい混雑でタクシーなど到底使えず、半日たっぶり歩き回ったので、さすがに疲れたが、アメリカン・フルブライターも大変喜んでくれ、また日本人会員もお互い話が出来て親しくなり、とても楽しい半日だった。

成田空港での出迎えサービスあれこれ

太田 隆次 ホスピタリティ委員会委員長
1967 U. of Wisconsin

成田空港での出迎えサービスについて、2004年10月現在までの活動と最近の現状を報告します。

1989年度から始めた「出迎えサービス」は川又邦雄(1968 U. of Minnesota)・桜子さん始め、ボランティアと家族の方々のご協力で、あしかけ15年間続いています。2004年10月現在で延べ139人のアメリカングランティーと家族の方々が成田空港で出迎え、最初の宿泊先まで届けました。

1989年からの数年間は、成田空港の施設は国際空港というにはお粗末で、ターミナルもリムジンバスの乗り場も狭く、出迎えにも恥ずかしい思いをしました。それが今は、ターミナルビルも二つ

に増え大きくなり便利になりました。

しかし、何もかもがうまくいくとは限りません。最近はありませんが、宿泊先が上野の「沢野屋旅館」だとタクシーがつかまりません。成田から最寄の上野駅に着きタクシーをつかまえて運転手にこの旅館の名前を言ったが最後、乗車拒否にあうこと必定です。この旅館は外国人に評判がよく新聞にもよく紹介されるので、ご存知の方も多いと思いますが、なにぶん駅から数分と近いので、中には「何時間も順番を待っていたんだ。あそこは困る。すぐ降りな」とすごまれたこともあります。運転手の事情も分かりますが、車では近すぎ、歩くには遠すぎる「沢野屋旅館」は苦手です。

それから中途のホテルまで迎えにくるというのも、助かるようですが双方が気疲れします。たとえば、成田空港から池袋のホテルまでリムジンで送ってもらえば、そこで引き継ぎますという申し出があったとします。航空機が時間どおりについて(A)、時間どおり入国手続きが済み(B)、時間どおり税関検査が終わり(C)、時間どおりバスに乗れて(D)、時間どおり池袋に着き(E)、のA、B、C、D、Eのすべてがうまくいけば問題はないのですが、それはあり得ません。池袋で待つ役の人はすべてが時間どおりという前提で(時には予定より早いこともある)池袋で待機することになります。成田でまだ税関からでてこないのに、池袋で待機していることもありました。

早く着くこともあれば2時間遅れることもザラですから、ストレスがたまります。予定より大幅に遅れて池袋に到着するまで、時間がたつにつれ欲求不満はエスカレートし、携帯電話で気まずい思いをしたことがあります。成田空港で出迎える一人の手間が、途中で迎える人がいると二人分の手間がかかります。

米国フルブライト・アソシエーション 第27回大会について

事務局長 正野 敏夫

1962 Arizona State U.

今世界中のフルブライターによる国境を越えた交流が、急速に進みつつあります。

今年の米国フルブライト・アソシエーション(U.S.F.A.)第27回大会は、オリンピック開催に合わせ、例年の開催地ワシントンD.C.を離れ、ギリシャのアテネにおいて10月7・8日両日開催されました。引き続き9・10日には、ギリシャのフルブライト・アソシエーション(Hellenic Association of Fulbright Scholars)大会が行われました。

もともとU.S.F.A.年次大会に、米国以外の世界各国フルブライト・アソシエーションの参加を呼びかけるようになったのは、2年前の02年、U.S.F.A.第25周年大会からです。

今年、米国以外の参加国は21カ国、37名でした。02年の23カ国41名、03年の14カ国19名に比べ、開催地がアテネであったため、EU諸国からの参加者が増加しました。

初日の基調講演で、米国国務省トムA・ファレル氏(U.S. Deputy Assistant Secretary of for Academic Program)は、フルブライト・プログラム運営方針についての要旨を次のように話されました。①米国人フルブライターの選考は、若く可能性に富んだ学部卒業者に重点を置く。②それぞれの専門分野で将来変革のリーダーシップを発揮する可能性のある人物を選ぶ。特に教育分野では、生徒への波及効果が期待できる小・中・高校の教育者プログラムを強化。③既にフルブライト・プログラムの恩恵を十分享受した大学より、米国南西部の大学を優先し、また先進国より、アフリカ、中東諸国を重視。④米国人フルブライターのアルムナイ活動を、ドイツや日本のように活発化させる。そのモデルとして、新たに米英両国アソシエーション間で相互協力活動を開始。

大会プログラムの一部であるGlobal Fulbright Network Seminarで話し合われた内容も年毎に変わっております。02年の発足当初は、フルブライト理念のもとに、広く世界各地域を包含するフル

ブライト・コミュニティを指向するよう見えしました。一方、既にEU諸国のフルブライト・アソシエーションは、それ以前からドイツ主導のもと、EU域内で相互交流を深めていたようです。

今年発表された、新たな米英二国間アルムナイ協力活動の内容は、アプレトン英国会長代行によれば次の通り、一部は日本で、米国人ニュー・グランティーに対し実施してきた活動に似ております。①ニュー・グランティーに対し、相互にホスト・ファミリー制度を設置。②両国アソシエーションの各行事に相互招待。③アルムナイ・Eメール・ネット・ワークを相互開放。④相互に空港出迎えサービスを実施。⑤両国アソシエーションのウェブ・サイトをリンク。⑥相互に会員名簿を交換。

今年5月、ドイツ・フルブライト・アソシエーションのハンメルスタイン前会長がフルブライト・ウェブ上で、来年2005年4月9日(土)はフルブライト上院議員の生誕100周年にあたるので、世界中の各フルブライト・アソシエーションが一斉に記念行事を開催しよう、と呼びかけました。この提案について次のような意見交換が行われました。

①05年4月9日(土)に記念コンサート等の行事を計画中のアソシエーションは、ドイツ、スウェーデン、パナマ、米国以下増加中。②各国のアソシエーションがそれぞれの行事に、「フルブライト生誕100周年記念」を使用。③各アソシエーションの都合により4月9日にこだわらず、05年中であれば良い。④記念行事の成功には、それぞれ各国のアソシエーションと教育委員会(例:日米教育委員会)の協力が不可欠。

その合間に、米国人参加者の一人エリック・ワード氏から米国フルブライト・アソシエーションとは別組織の、ウェブ上で科学・技術分野(含社会科学)を専門とするフルブライターの世界ネットワーク・ワークを目指すThe Fulbright Academy of

Science & Technologyに日本人フルブライトの参加を要請されました。

<http://www.fulbrightacademy.org>

ホワード氏は93年に設立されたこのNPOの事務局長で、英国フルブライト・アソシエーションのニューズレター本年秋季号に紹介記事を寄稿しております。

今回、中国から初めて02年留学の学部長クラスの若手教授2名が参加しました。日米フルブライト・プログラム、および日本のアルムナイ活動についても取材を受けましたが、米中両国間で、米中教育委員会の設置と、08年オリンピックに合わせ、U.S.F.A.の北京招致を目指して交渉が行われているようです。この点につきその後U.S.F.A.から、08年International Fulbright alumni conference開催のためのボランティアの募集案内が来ました。

<http://www.fulbright.org/2008>



03年 ワシントンD.C. U.S.F.A.第26回大会



03年 ワシントンD.C. U.S.F.A.第26回大会

以上ご報告しましたように、今年の大会の特徴として、EU諸国アソシエーションの活動活性化、米英両アソシエーションの協力活動、08年U.S.F.A.大会北京開催への動きなど、多国間から、地域内、2国間への指向が感じられました。

振り返れば、02年大会では多国間の国際理解が強調され、翌年の03年大会では、トム・コール下院議員（共和党）によるブッシュ大統領のイラク政策支持の基調講演に対し、多数の反対意見が述べられるなど、毎年のU.S.F.A.大会に見られる変化には興味深いものがあります。これから日本のアルムナイ活動は、このようなフルブライトの国際交流活発化の動向に留意しながらも、ガリオア・フルブライト・プログラムに対する謝恩のため、より多くの米国人留学生招聘を原点とすることには変わりはないと思います。それにしても、各国アルムナイ・アソシエーションの会議参加者は皆若く、留学年度で見ると、ほぼ全員80年代以降で、日本も同世代フルブライトの参加が必要と痛感しました。

日本フルブライト・メモリアル基金 (J-FMF) 協力

嶋 正彦

1951 U.of Illinois

有難う アメリカ 「マイクの最初の朝食」

早朝体操の帰り、一人のアメリカ青年を見た。「何をしてるの?」「レストランを探しています。昨夜遅く着いたので、何か食べたいんです」「ウン。今、6時だぜ。レストランはどこも開いてないよ。いっそ僕の家に来るか?」私の家内は、真夜中に酔払いを連れてきたって少しも動じないタイプだから、腹の減ったアメリカ青年の一人や二人に驚かない。忽ちハムとエッグ、トーストが出て、この青年マイクは日本での最初のメシを我が家で喜んで食べた。その後も、私たちは彼と友人たちをクリスマスパーティーに招いたりした。

「FMFと最初のディナー」

FMFは毎年、数百人のアメリカの先生のために、各地での小中高校の見学を含む日本研修をお世話して、交通、ホテル、役場との交渉、ホームステアのアレンジなど大変な努力をされています。こんな話を聞きました。和歌山県の山村で児童が特産の備長炭の木琴でアメリカのフォークソングを演奏したら、先生方は皆泣かれた相です。FMFの方々のお陰で、先生方は皆、日本のファンになれるようで、皆さんはアメリカと日本を結ぶ沢山の小さな橋を作っているのです。私たちはFMFのお手伝いとして、先生方が到着される晩のディナーをお世話していますが、それは「マイクの朝メシ」のように、とても有意義だと思っています。

「終わらないアメリカへの恩返し」

さて「ガリオア留学」とはアメリカ青年が除隊する時に与えられる「GIビル」を旧敵国の青年にも適用して、旅費、授業料と月75ドルを呉れて、

大学で勉強させるのですから、その寛容さに驚きました。私は物凄く色々なことを教わりました。私は全身の毛穴の一つ一つからも新しいものを吸収しようと必死で、あんなに勉強した一年間はその後ありません。この生涯学習を最も有効にした一つの「触媒」がありました。それは緒方副総理（緒方貞子さんの義父）から出発前に頂いた「友達を沢山作りなさい」と言う餞の言葉です。それは留学中のみならず、その後の私の生活の有力な指針となりました。さてガリオアの最も忘れられない価値は、私の一番奥の部分に一生消えない文字を深く彫りこんだことです。私は留学の前と後では根本的に変わったと思うし、「心」のリハビリでもありました。当時私はそれ迄の価値観を打ち砕かれ、何も信ぜず、絶望的でした。こんな私が失った自分のカケラを拾い集め、自分自身と「自分の中の日本」を再建することができたのです。日本と全く正反対の国で日本的なものを取り戻したのは不思議なことです。

私は朝鮮戦線のアメリカ青年に献血をしました。それは貧乏な私が出来るたった一つの感謝の印でした。私たち家族は小さな恩返しをやっていきますが、直ぐにアメリカ人のお世話になってしまう。サウスダコタ山中の夕暮れ、フラットタイヤして困っていたら一台の車が止まり、タイヤ交換をしてくれました。彼は「日本に進駐したことがある。日本は好きだよ」と言って、走り去りました。三拜九拝です。驚いたことに彼は1マイル先で車を止め、私の車のボルトをもう一回締め直してくれたのです。アメリカ人はどうして、こんなに親切なのでしょう。私たち家族がいくら恩返しをしても、終ることがないのです。

FMFプログラムは、フルブライト・プログラムに対し謝意を表すため、日本政府の資金により、毎年約600人の米国人初等・中等教育者を3週間日本に招聘し、教育、文化、産業などを見学・体験しながら交流してもらうプログラムで、1997年に開始されました。

当会会員はFMFからの依頼にもとづき、ボランティア活動として、これから米国人教育者が最初に東京に到着した日の夕食案内と、受入都市の市長表敬訪問に日米教育委員会代表代理として同行することを行って来ました。

2003年11月以降の夕食案内にご協力いただいた会員数と、市長表敬訪問に同行された方々（敬称略）は次の通りです。

2003年11月	夕食案内：17名
2004年6月	夕食案内：22名
	都市同行：岡本秩典（東京都港区）
10月	夕食案内：21名
	都市同行：佐藤満秋（長野県塩尻市）
	太田敬雄（群馬県安中市）
	田島 穆（千葉県君津市）
	岡本秩典（東京都荒川区）
	堀江 昭（神奈川県伊勢原市）
	安河内景山（山梨県甲府市）
11月	夕食案内：26名
	都市同行：浜田竜之介（茨城県牛久市）

*本年11月、日本フルブライト・メモリアル基金 (J-FMF) に名称変更しました。

1982	日本のフルブライト・プログラムの30周年を機に全国9地区（北海道・東北・東京・中部・京都/滋賀・大阪・中国・九州・沖縄）に、ガリオア（1949～51）を含めたガリオア・フルブライト同窓会を各地区ごとに結成
	同窓生を対象に、主に米国人招聘の目的で第一回個人募金を展開し、4,400万円余りの寄付金が集まる。またその一環として日米交流チャリティー・ゴルフ大会も始まる。
1983	フルブライト上院議員を招き記念の昼食会
	経済団体・企業を対象とする募金開始
1986	同窓会募金をもとにした奨学金による留学生受け入れ始まる。
1986	(財)日米教育交流振興財団(フルブライト記念財団)設立
1987	第二回個人募金により、4,600万円余りの寄付金が集まる。
1988	東京同窓会・懇親会（4/20）に、皇太子殿下（現天皇）・妃殿下（現皇后）がご臨席された。
	北陸同窓会が結成される。
1990	フルブライト上院議員来日、『フルブライト夫妻歓迎会』を開催する。
	東京同窓会主催で、新着米国人フルブライターの歓迎レセプションに、高円宮殿下・妃殿下がご臨席された。
1991	ニューヨークに『日米ガリオア・フルブライト同窓会』が結成される。
1992	日本のフルブライト・プログラムの40周年を記念し、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会、フルブライト記念財団の共催により、アメリカ再発見旅行、全国大会（9/18、天皇皇后ご臨席）、フルブライト賞授与、記念品販売、フルブライト記念音楽祭（10/13、皇太子殿下ご臨席）、記念出版などの行事が行われた。
	第三回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
1995	フルブライト上院議員逝去
1996	四国同窓会が結成される。
	世界のフルブライト・プログラムの50周年記念行事『アジア・シンポジウム』を日米教育委員会が開催し、シンポジウムとレセプションへ皇太子殿下妃殿下がご臨席された。
1997	第四回個人募金により、約3,000万円の寄付金が集まる。
1999	2002年のフルブライト・プログラム50周年に向けて『フルブライト公開講演シリーズ』を開始
	ガリオアプログラム50周年（1949～99）を祝い、『ガリオア50周年記念レセプション』を開く。
2001	第五回個人募金運動開始
2002	日米フルブライト・プログラム50周年を記念し、日米教育委員会、日米教育交流振興財団の共催により、記念切手発売（5/8）、フルブライト音楽祭5/9(木)、美術展示会（5/20-26）フルブライト公開講演シリーズ最終回（5/25）、レセプション（5/25、天皇・皇后両陛下ご臨席）、公開記念式典/フルブライト賞授与/シンポジウム（5/26皇太子・同妃殿下ご臨席）アメリカ再発見旅行（9/20-29、ボストン、ニューヨーク、ワシントンD.C.ほか）、記念品販売、記念出版などの行事が行われた。
	第五回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
2003	事務所移転（9/16）
2004	会則を一部変更し、名称を「東京フルブライト・アソシエーション」に改めた。（5/26）

日米教育交流振興財団の状況 (フルブライト記念財団)

理事長ご挨拶



賀来 景英

フルブライト記念財団理事長
1968, U. of Chicago
President, Fulbright Foundation

日米教育交流振興財団——私たちは日頃フルブライト財団と呼びならわしているが——は、1986年、日米交換留学をサポートするための日本の民間募金の受け皿組織として設立されたと聞いている。日本での民間募金自体はその4年前から始まっており、当初はフルブライト基金でアメリカに留学したOBの「ご恩返し」の事業として、交換留学支援といっても、主として、アメリカ人学生・研究者を日本に招くプログラムとしてスタート、やがて広く一般の企業の方々のご理解、ご協力を得て今日に至っていると承知している。

いま、「アメリカへのご恩返し」といって、異和感を持たれる方も多いと見るのが正直なところであろう。時が経ち、かつての貧しい日本は世界最大の債権国となり、アメリカ留学の機会は限りなく広い。「ご恩返し」が異和感を伴うかもしれない理由はそればかりではない。世界の多くの人の心に映るアメリカ像は、今日、決してポジティブばかりとはいえないのが残念な実情であろう。しかし、私たちがフルブライトプログラムから得たものは単に留学資金、おカネだけではなかった。そこには、相互理解を通じてより良い世界をつくらうとする広い精神、暖い心情があり、フルブライトプログラムに参画出来たことで私たちはその一端を嗅ぎとり得ていたように思う。このようなアメリカへの「ご恩返し」は今も、あるいは今こそ、意味を持つ。

きびしい経済情勢の中にあって、フルブライト財団の果たせる力も小さく限られているのが現状

である。フルブライト同窓生のうちからも外からも一層のご支援を賜りたいと切望するが、同時に私たちは智慧も必要としているのだろう。日米間の交流機会が拡がり多様化する中で、私たちの財団がどのような役割を担っていけばよいのか、また担っていくべきか、皆様とともに考えていきたい。おカネだけでなく、智慧も結集して、いつの日か、「恩返しされる」日本でありたいものである。

1. 募金活動

1986年ガリオア・フルブライト同窓会は、より多くの米国人留学生を日本に招聘するための募金活動を円滑にする目的で、日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）を設立しました。財団は以後個人・企業・団体から寄付を受け入れ、毎年約1億円をフルブライト・プログラムに提供しております。近年の募金状況は次の通りです。

冠 名	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度(予算)
A50	94,415	13,010	12,500	12,500
国際経済交流財団	6,905	3,957	931	
トヨタ自動車(株)	5,000	5,000	5,000	5,000
三菱グループ	5,000	5,000	5,000	5,000
YKK(吉田育英会)	10,000	10,000	10,000	10,000
日本航空(株)**			9,759	10,000
チャリティー・ゴルフ	5,482	4,675	3,881	4,000
個人募金	36,577*	3,952*	80*	1,000
上村和子様		5,000		
緒方貞子様		1,200		
三上泰永様			135,801	
合 計	163,379	51,794	182,952	47,500

*50周年記念個人募金：2001年度36,577千円、2002年度3,851千円、2003年度80千円、合計40,508千円

**航空券による寄付

2. 下記ホームページにより、次の資料がご覧になれます。
<http://www.fulbright.or.jp>

- ① 寄付行為
- ② 役員名簿
- ③ 2003年度事業報告書
- ④ 2003年度収支計算書
- ⑤ 2003年度正味財産増減計算書
- ⑥ 2004年3月31日現在貸借対照表
- ⑦ 2004年3月31日現在財産目録
- ⑧ 2004年度事業計画書
- ⑨ 2004年度収支予算書

なお、財団の透明性およびディスクロージャーをこれまで以上に充実させるため、2003年度より中央青山監査法人による外部監査を受けております。

3. 地区別役員等名簿

2004年6月25日開催の財団理事会・評議員会で選任された2004/2006年役員等の名簿は次表の通りです。

2004/2006年日米教育交流振興財団・地区別役員等 (敬称略)

地区	顧問 (4)	理事 (25)	監事 (3)	評議員 (21)	審査委員 (10)
北海道		有江 幹男	高向 巖	熊本 信夫 小柳 知彦** 関口 恭毅	曾野 和明
東北		青木 茂之 仁科 雄一郎		高橋 綱夫 吉川 清隆 佐々木 肇**	菊池 和聖
東京	大河原 良雄* 平野 龍一***	理事長 賀来 景英 副理事長 原田 敬美** 小西 輝明 渡邊 宏 内古閑 俊二 佐藤 満秋 桐淵 利博 開原 成允**	高澤 廣茂	太田 隆次 深尾 凱子	審査委員長 山本 澄子
中部		木下 宗七		千田 純一 上田 慶一	藤本 博**
京滋	岡本 道雄*	榊原 胖夫 川又 良也**		岩山太次郎**	千葉 哲郎
大阪	金辻 信弘	清澤 悟** 牧野 信夫 吉川 素三**		松田 武**	山藤 泰
中国		木村 榮一 隅出 昂伸		三好 啓治	祐宗 省三
九州		原口 三郎 今里 滋	吉村 徳重**	林 弘子 落合 太郎 西田 昭彦	高橋 勤**
沖縄		比嘉 幹郎 東江 康治		川満 敏 宮城 宏光 下地 守	瀬名波 榮喜
北陸		増田 信彦**		森田 幸夫	橋爪 祐美
四国		三木 吉治		太田 英章	

* 最高顧問 ** 新任役員 *** 2004年7月16日逝去

2004年度財団奨学生冠名リスト

採用者数： Fulbright Fellows (Recent B.A.) -FF 5名
Graduate Research Fellows (Graduate Students) -GRF 6名
Graduate Students—Japanese -GSJ 2名

冠名 (敬称略)	奨学生名	カテゴリー	受入大学名	出身大学 (最終) 名
<Americans>				
1. T F A	CHANG, David K.	FF	東北大学 (経済学)	U. of Pennsylvania (Economics)
2. トヨタ自動車	HRACHOVEC, Anna K.	FF	名古屋大学 (人文科学)	Dartmouth Coll. (Other Humanities)
3. 志野基金	MEYER, Laura M.	FF	大谷大学 (宗教学)	Boston U. (Religion & Theology)
4. 三菱グループ	SCHWARTZ, Jennifer A.	FF	九州大学 (政治学)	U. of California (Political Science)
5. T F A	SMITH, Jonathan J.	FF	神戸大学 (音楽学)	U. of Florida (Musicology)
6. 三上基金	DE GANON, Pieter S.	GRF	京都大学 (日本史)	Princeton U. (Japanese History)
7. 三上基金	EMMERICH, Michael D.	GRF	国文学研究資料館 (日本文学)	Columbia U. (Japanese Literature)
8. T F A	HEUSCH, Barrett J.	GRF	国士舘大学 (日本文学)	U. of California, Berkeley (Japanese Literature)
9. T F A	MOSKOWITZ, Nona D.	GRF	東京都立大学 (人類学)	U. of Virginia (Anthropology)
10. T F A	SHETTLE, Sheila CA.	GRF	東京大学 (国際関係論)	New School U. (International Relations)
11. Y K K	WHITELAW, Gavin H.	GRF	早稲田大学 (文化人類学)	Yale U. (Cultural Anthropology)
<Japanese>				
1. Y K K	澤田 悠紀	GSJ	Harvard U. (Law)	東京芸術大学 (音楽学)
2. 上村和子	野口 久美子	GSJ	U. C. Davis (American History)	立教大学 (アメリカ史)

2004年度A50奨学生リスト

採用者数： Fulbright Fellows (Recent B.A.) -FF 5名
Journalist -J 2名
Graduate Research Fellow -GRF 3名

冠名	奨学生名	カテゴリー	受入大学名	出身大学 (最終) 名
<Americans>				
1. A50	BRUTLAG, Katherine A.	FF	京都大学 (天文学)	Middlebury Coll. (Astronomy)
2. A50	FOLLETTE, David J.	FF	京都大学 (機械工学)	Princeton U. (Mechanical Engineering)
3. A50	KLIMAN, Daniel M.	FF	京都大学 (政治学)	Stanford U. (Government & Political Science)
4. A50	KIM, John H.	FF	北海道大学 (生態学)	Princeton U. (Ecology)
5. A50	KOMATSU, Lauren EM.	FF	金沢大学 (国際関係論)	Brown U. (International Relations)
6. A50	BOWERMASTER, David J. J	J	At Large (社会学)	Seattle Times (Social Science)
7. A50	CUNNINGHAM, Philip J.	J	京都精華大学 (社会学)	Free-lance Journalist (Social Science)
8. A50	CULVER, Annika A.	GRF	早稲田大学 (日本史)	U. of Chicago (Japanese History)
9. A50	PARK, Gene	GRF	財務総合政策研究所 (政治学)	U. of California, Berkeley (Political Science)
10. A50	PEUCHAUD, Sheila R.	GRF	未定 (ジャーナリズム)	U. of Missouri (Journalism)

A50/フルブライト奨学金は、2001年サンフランシスコ平和条約締結50周年記念にあたることから、戦後日本の再建にあたって、米国から受けた様々な支援と協力に対し謝意を表すため行われた、A50事業の一環として創設されました。「A50」の「A」はAppreciationとAmericaの頭文字であり、「50」は50周年と全米50州、さらに次なる50年を意味します。

事務局からのお知らせ

1. 2004年秋の叙勲で、スリランカ問題担当日本政府代表の明石康様（1955 U. of Virginia）と、財団法人日本科学技術振興財団会長の有馬朗人様（1959 Argonne Nat'I Lab）がご受章（文化功労賞はご受賞）になりました。会員一同心よりお祝い申し上げます。

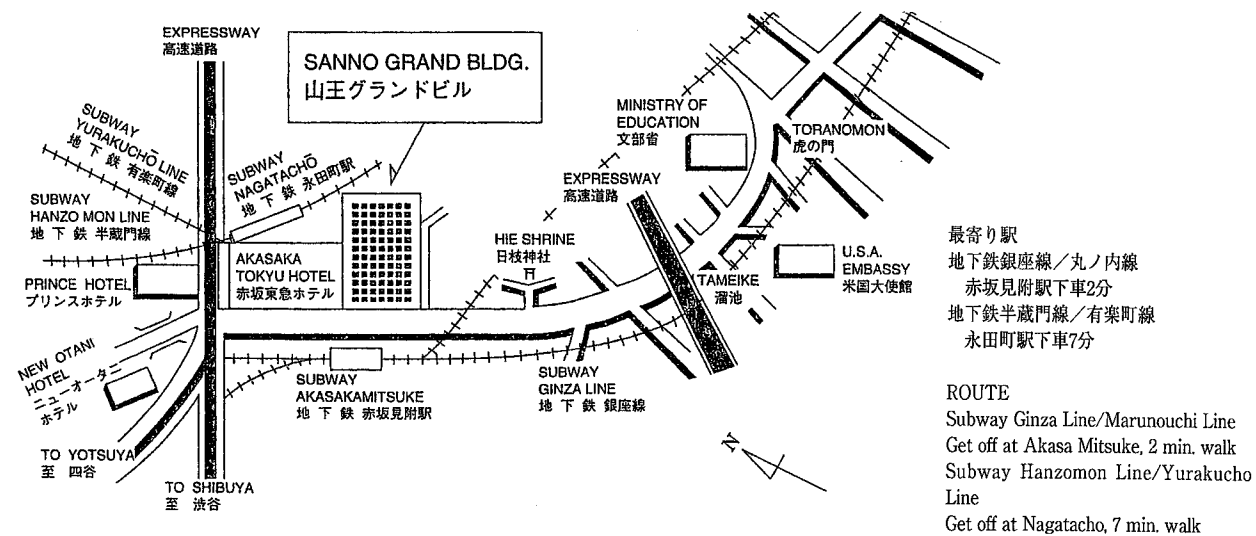
明石 康様 旭日大綬章
有馬 朗人様 文化功労賞 旭日大綬章

2. 2003/2004年度中に次の方からご著書をご寄贈いただきました。お礼申し上げますとともに会員の閲覧に供します。

比嘉幹郎様（1954 U. of California, Berkeley）：
「写真とエッセイ-米留五〇年」（ガリオア・フルブライト沖縄同窓会）
竹山 哲様（1966 U. of Texas）：「現代日本文学『盗作疑惑』の研究」（PHP）
比嘉廣好様（1952 U. of New Mexico）：「戦火を駆けぬける青春と活学」（新星出版）
太田隆次様（1967 U. of Wisconsin）：「もっともわかりやすい人事部の仕事」（PHP）
：「トータル成果主義-その導入と運用の実務」（日本法令）

3. 事務局は、日米教育委員会事務局と同じ山王グランドビルの地下1階B135区で、業務を行っております。どうぞお気軽にお立ち寄り下さい。（平日 10:00~16:00）

案内図：



4. 本号の明石康氏講演、開原会長およびサターホワイト日米教育委員会事務局長のインタビューは、一部掲載を割愛させていただきましたが、下記のHPで全文がご覧になれます。

今号の発行にあたり、多くの方からご寄稿、また広告掲載などご協力、ご支援をいただきましたこと、改めて感謝申し上げます。
(事務局長 正野敏夫)



東京フルブライト・アソシエーション
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビルB135
TEL: 03-3503-1841 FAX: 03-3503-0758
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp

(HPは、日米教育委員会のHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。)

水戸市文化財活動



同窓会 (64)

同窓会 (74)

